樹齢三百年の「一本杉」を訪ねて

あとがき

近ごろ、旅先きの土産物屋の店先で、よく「〇〇昔ばなし」という小冊子が目に止まります。気に入ったものがあると、それを求めて列車の中で目を通したりしますと、その土地自身の歴史と、そこにまつわる昔ばなしがオーバーラップして、旅をいっそう楽しいものにしてくれます。

今みたいに、なんでも機械化され、画一的になってしまっては、人間のもつ創造力とか感性が失われてしまいます。私たちはこの、失いかけているものが、いかに人間的であり不可欠のものかということを決して忘れてはいけないと思います。その中の一つに、昔ばなしもあるのではないでしょうか。

その土地の伝説や昔ばなしは、そこの自然に無理なくとけこんでいって、子どもたちだけでなく、大人にも親しまれ伝えられていくものだと思います。ここに、「松風のうた」につづいて、「りゅうとてんぐの力くらべ」ができあがりました。まもなく、大谷公園もできあがる予定です。これで、大谷公園を訪れる楽しさが、また大きく広がった思いがします。

大谷公園を散歩しながら、「やきもの師」や「りゅうやてんぐ」「一本杉」のあったころのことを考えることは、どんなに楽しいことでしょう。わたしたちも、この上地の昔に夢を走らせながら、第三話を期待したいものです。

おしまいになりましたが、さし絵をかいてくれた三年生の鈴木真一君・大北哲生君・成瀬貴彦君、四年生の平有祐君・都築正範君・落合直子さん、ありがとう。

上地小学校校務主任　本田　源美

8、樹齢三百年の「一本杉」を訪ねて

一、昔の人の心

昔からどこの村にも一本杉や一本松がありました。

故郷を後に村を出る人は、この木に別れを告げ、旅から帰ってきた人は、まっ先にこの木を見つけ「ああ、やっと故郷へ帰れた」と喜んだものです。

こういう木は、ただ目印になっただけではなく、古くて大きい木には、霊魂が宿っていると信じられていました。だから、しめなわをかざったり、さくを作ったりして大切にしたものです。

反対にこの木をそまつにすると、何かたたりがある、という言い伝えさえ残っています。

また、今でこそ、ヘビは嫌われていますが、お宮や屋敷にすんでいたヘビは「神のお使い」「守り神」としてとても大事にされていました。ヘビがいると縁起がいい、家が栄えるといって歓迎したこともあります。

現代の生活からみると、科学的に割り切れないことですが、こういうことの裏に、昔の人の願いや祈りの心をうかがい知ることができるのです。

ここにまとめた「岳井の一本杉」にも、三百年間にわたる上地地区の人たちの思いがこめられています。本章の作成に当たり、次の方々のご協力をいただきました。皆様に厚くお礼申し上げます。

上地一区総代　佐藤　益荒　氏　　上地第一特定土地区画整理組合理事長　畔柳八百吉氏
上地四区総代　成瀬　　司　氏　　上地第一特定土地区画整理組合副理事長　畔柳市太郎氏

二、「上地町字岳井（がくい）七番畑」にあった

「昔、大谷の近くに大きな一本杉があったそうだ。」

こんなことを耳にしたのは、「ふるさとシリーズ」を手がけ始めた昨年の夏でした。一度、学区の古老の方たちをお訪ねして調べなくてはと思っていた矢先です。

上地学区の成瀬司総代会長さんが旧上地町の古文書を持って来て下さいました。第一公民館に古くから保存されている貴重な資料です。

「聞いたところによると、上地郵便局から北の方に行った所にある岳井の辺りだということです。」

一本杉の場所まで教えて頂き、これはいよいよ調べなければと思い立ってまとめたのが、この「樹齢三百年の一本杉を訪ねて」です。

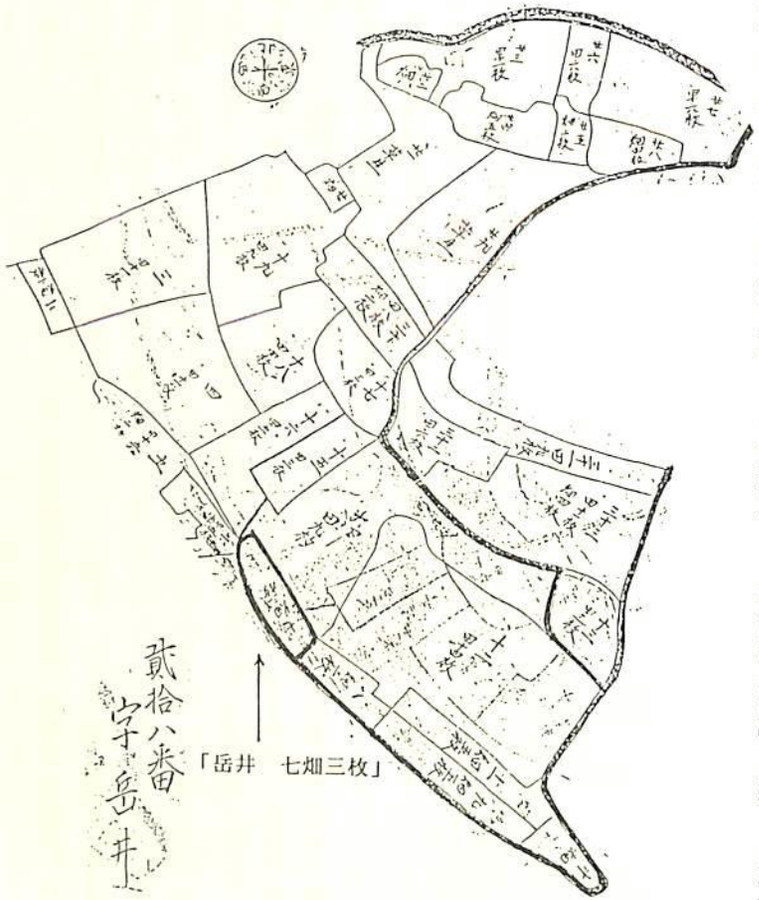
さて、先ず、二つの「資料」を紹介しておきます。

一つは江戸時代の「地籍字分全図」で、白ボール紙程の厚さの和紙に手書きされた「上地村」地図です。横幅二百七十センチメートル、縦百三十四センチメートル、職員室の一角に広げてみました。上のように、当時の上地村総代と戸長の署名捺印があります。その他、「村界・字界・池川溝梁・耕宅地山林原野・道路・堤塘・神地・畦畔」が地番と共に詳細に記されています。

今、はやりの極細ペンをもっても書き得ないような地図を完成させていることも驚きです。一本杉のあったという地番・地目は「岳井七　畑三枚」とあります。

「上地村」地図の表紙

二つ目は、薄手の和紙七十枚を綴って製本されている「字絵図及一村全図　額田郡上地村　明治九年」です。「一番大池」から記され、「二八岳井」「三二大谷」「五十四横手野」と続き「六十一久後原」で終わっています。



江戸末期の「上地村」の「地籍字分全図」

二、周りは田んぼだった

冬休みが終わってから、上地第一特定土地区画整理組合理事長の畔柳八百吉氏・同理事の畔柳市太郎氏・上地一区総代の佐藤益荒氏とご一緒に、加藤信太郎氏（八十四才　上地町字大谷十一番地一在住）宅をお訪ねしました。お聞きする度に目を細め、過去の記憶を次々と思い起こして下さり、訪問は二度三度と続きました。「手が不自由だけれど、おかげでまだ頭の方は確かです。」と言われるように、信太郎氏のお話は、同席して頂いた他の三氏の記憶と重なりあって新しい「発見」を次々と引き出していきました。

「一本杉のあった所は、周りが田んぼだった。子どもの頃から、よく目立つ木だった。周りが、低くて湿地だったので木があった場所が八畳ぐらいの塚になっていて、その真ん中に生えていた。遠くから見ても、ああ、杉の木があるなあと、すぐ分かったもんです。この木に、登ったりさわったりということは滅多にしませんでした。

それは、よその家の田んぼに入って行かなければ、近寄れなかったからでしょうね。だから、地元の人たちも塚の中に、あまり入ることもなかったと思います。樹齢三百年とあって、村の衆が気持ち悪がって、半分は近寄りがたいとも思っていたから、かえって大事に保存されてきたとも言えるでしょう。一般の杉の木と全く違い、一本杉はこんもりと茂っていた。一度見たら忘れないような形だった。幹も根本から三つに分かれていて、伐採される前の写真で枯れ葉のついているのが一番背丈が高かった。」

信太郎氏のお話がきっかけになって、集まった方たちの幼かった頃の思い出が一層はっきりと、一本杉の姿を浮かび上がらせていきました。

「そうだった。まんまるとした、こうもり傘のような形だった。根本の太さは一尺五寸ぐらい、高さが二間半といったところだろう。三百年にしては、低い杉だが、周りが沼や湿地、田んぼじゃあ、大きくなれなかったんだろう」

記憶がよみがえり、一本杉を囲んでいた田んぼや湿地に話題が発展していきます。

「安城の桜井から、度々、どじょうをつかみにやって来た人がいた。見ると、夕方つかみに来て一晩で二斗ぐらいは、いつもバケツに入っていた。たにしもおって、これも、バケツに二杯はとれていた。」

「そうやってつかまえた後で、しゃぼ池（奥山田池）で泥を洗い落したもんだよ。」

「そうだ。私もよくつかみに行った。田んぼだけじゃあなくて、一本杉一帯の湿地で、どじょうをバケツに四杯ぐらいはすぐだった。手を突っ込めば、必ず手にどじょうがさわったからねえ。」

「しゃぼ池には、鯱ぐらいの太さのうなぎもおった。」

どじょうからたにし、うなぎと、子どもの頃の話に花が咲きます。と、信太郎氏が遠い過去に思いを寄せ、更に話を続けます。

「うでぐらいの太さのうなぎで思い出したが、しゃぼ池には、ワニぐらいなのがおった。百姓衆が三本備中で頭をくすげて捕まえたと聞いている。」

「岳井の一本杉」を仰ぎながら、上地村の昔に生きた先人たちが繰り広げてきた夢いっぱいのドラマが尽きません。「杉の木を傷付けただけでもバチが当たる」と、教え諭されて育ったという三氏は、区画整理事業のため伐採をしなければならなくなった時、神主さんに依頼し丁重にご祈祷を捧げたことを付け加えられました。

伐採直前の「一本杉」

四、一本杉の記念碑を訪ねて

一月の初旬、上地一区佐藤総代さんのご案内を頂いて、上地八幡宮境内の第一公民館を訪ねました。区画整理組合理事の畔柳市太郎さんが、一本杉を伐採した後、この公民館に保存されたことをお聞きしていたからです。

二階に上がると、階段の正面に、話題の一本杉が丁寧に磨き込まれた姿を現わします。

「この碑に当時、分かっていた範囲のことを書いて貰ったんです。こうして、残してよかったねえ。」

市太郎さんのお話に、畔柳八百吉理事長が目を細め笑顔でうなづかれました。嶋田校長が、

「本当です。こうして、区画整理組合の皆さんが保存を思い立たれたおかげで一本杉の面影に接することができます。」

ていねいにお礼を申し上げています。

郷土文化財保存についての先見性を存分に発揮して下さった方々に記念撮影の主役になって頂きました。

「大草の専門家の所に持って行って磨いて貰った」ことをはっきりとうかがい知ることができます。

「伐採」後五年目を経過したこの日、初の対面を果たす上地小

上地第一公民館で佐藤総代・畔柳理事長・畔柳副理事長

学校職員を前にした一本杉です。夕暮れの陽光を浴び、三百年の歩みを経て静かに重々しく輝いています。

次に、上地学区の「重要文化財」ー碑文ーの全文をご紹介致します。

思い出深い岳井の一本杉

一本杉が残した古い枯れ木の思い出の記念品として公民館の一ケ所に保存することになりました。一本杉の由来に関しては正確な事は分らないが古人から言ひ伝へて来た事を参考にして書き残したいと思います。

此の杉の木の生へて居た所は上地村の古い土地図面の中の字岳井の七番地（地主　鈴木岡乃助氏）で現在土地区画整理中で番地は未定との事。樹齢凡参百年位木の生へて居た処は今から五十年程前迄は四坪程の小高い農地の中の土地で木の根元に非常に大きな蛇（頭から三分の二位迄は白色で残は普通の縞蛇と同じ色との事）がドクロをかいて住んで居たと言ふが何時の間にか姿を消して居なくなり、杉の木も次第に枯れて最近は青葉を残す一枚しかない枯木と化し農民の昔木陰を偲ぶ憩の場所も消えんとするや区画整理で取り除かれる事になったので当所の住民左記発起人の手に渡り種々手入されて枯木の姿を永久に残したいとの念願で此処に保存する事になった次第であります。

昭和五十八年二月十七日　発　起　人　畔柳　八百吉
畔柳　市太郎
稲石　正美
畔柳　信次

本文及筆者

五、根本に白いヘビが住んでいた

昭和五十八年二月二十八日、いよいよ、「上地のご先祖様が残してきて下さった一本杉を取り除くことになりました。」（畔柳市太郎氏）その時の心境を氏は、次のように話されます。

「区画整理事業の邪魔になるから切るというのですから、大変です。ご祈祷を上げればよいなどということでは済まされません。しかし、そのまま放置すれば、根本から腐って枯れ果ててしまうことは誰の目から見てもはっきりしています。組合の者でいく度か相談した結果、やむなく伐採を決めました。もう枯れ果てる寸前の見るも哀れな姿だけれども、三百年間もの長きに渡って上地に生きてきた一本杉です。根本から切って、というより掘って取り除きました。そうして、第一公民館に保存することにしたんです。」

こうした、温かな配慮のおかげで、今日、誰もが一本杉と対面できることになったのです。

「私たちも、昭和二十七年の土地改良事業の時に、伐採の話が持ち上がったけれど、その時はバチが当たるといけないということで見送ったいきさつがあります。」

かたわらから、こう話し始めた信太郎氏の「バチ」という言葉が、「白蛇」の実話に発展していくことになります。同席した、嶋田校長・青木先生も、一本杉にまつわる「新事実」への急転換に胸を躍らせて聞き入りました。「親に言われて、初めて見たのが子どもの頃、昭和十八年です。一本杉の根本に、何をするのでもなく、じっととぐろを巻いていた。人にかみついたりして、危害を加えなかったので、親からも絶対に殺したり、いじめたりしないように教えられていた。おもしろいことに、時々近所の屋敷に遊びに出かけ、家のそこの庭にも来ていたんです。真っ白な蛇だから、一度見たら忘れたり間違えたりということは絶対ないと思う。ヘビの太さは、バナナより少し細いかな、長さは一メートルといったところでしょう。縞蛇（しまへび）の仲間だろうから、色を除けば、特別変わったところはないのかも知れません。」

岳井の一本杉　記念碑

氏が言われるように「縞蛇」は、全国どこでも見られるヘビで、黒みがかった褐色のすじが頭から尾に向かって走っています。大きなものでは、一・五メートル程度まで成長します。続けてお聞きしましょう。

「昭和五十八年に一本杉が切られてしまってからも見ました。だから、四十年間も生きていたことになります。近所のお年寄りもやって来て、わしの家にも白いヘビが来ておると話していました。杉の木の隣にあった柿の木に登っていたのも見ています。しかし、この頃はもう見たことがありません。まだ、どこかで生きていてくれるといいのですが……。」

こうして、五年前までは、各所で話題となってきた白蛇は、上地の地で静かに眠ってしまったのでしょうか。

近くに居を構える方たちを初め、上地っ子の目にもとまっていないことから、一本杉の後を追い、果てしない旅を続けているのでしょうか。

開発なった上地を後にした、白蛇の姿を見ることができるのでしょうか。

「もういっぺんでいいから、白いヘビが見たい。おとなしい奴だったから。今の上地に住む人や子どもたちに見せてやりたい。夢かなあ。」

信太郎氏が、冬の夕日に輝く、静かな自宅の庭に目をやりながらほっと息を吹きました。

自宅の庭で加藤信太郎さん

六、夢と謎を呼ぶ一本杉

「上地の文化財」との考えから、単なる伐採に終わることとなく、上地第一公民館に永久保存されて今日を迎えることとなった一本杉です。これは、保存問題を提起された畔柳市太郎氏を初め区画整理事業に当たってこられた理事の皆さんのふるさとに寄せる深い愛情の賜物です。

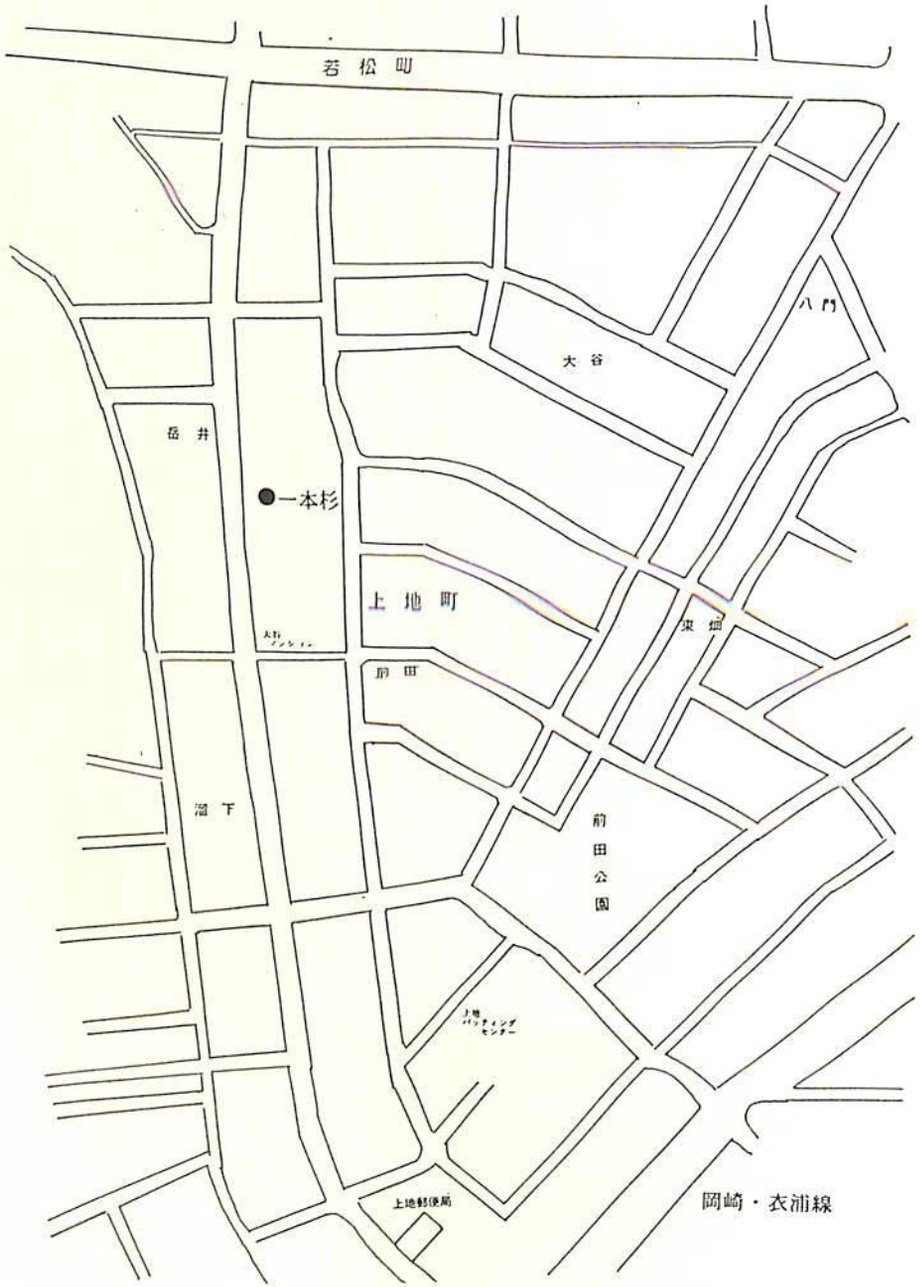
信太郎氏が言われるように「一本杉をかからかすと具合が悪くなる。」と、先祖代々伝えられて来たから、三百年の長きにわたって生き続けてきたのでしょう。

周囲が田んぼの中という条件の悪い湿地に、一本杉が「大木」にまで成長しなかったにせよ、何故守り育てられてきたのでしょうか。こんな素朴な私たちの疑問を耳にして、氏は祖父の代から聞いていたことだがと前置きして言われました。

「上地に「八門」（ようかど）という字がありますが、ここには昔、郷士（ごうし）の屋敷があったということです。地名からも推察できるように、この屋敷は、八つの門があったと言います。このことからも分かるようにすごい広さだったようです。一本杉は、その郷士の塚じゃあないかと聞いていた。」

「郷士」といえば、江戸時代に武士でありながら城下町に移らず、農村に居住して農業を営み、武士としての特権を行使していた高い身分の者です。そこで、上地学区が江戸幕府直属の天領時期を経てからは明治に至るまで吉田藩所領にあった事情から、豊橋市史を調べてみました。

しかし、吉田藩から見れば、上地が単なる飛び地的存在でしかなかったからなのでしょうか。「八門」にふれた記述を見ることはできませんでした。今のところ分かり得たことは、寛政二年（一七九〇年）上地村総戸数八十九、総人口五百五十三人という数字だけです。大谷村を合併した明治七年（一八七四年）上地村総戸数が百五十三、総人口六百六十九人でした。このへんの「郷士」をめぐる史実は私たちに残された課題として、引き続き



「一本杉」周辺の上地町地図

先輩諸兄のご指導を得ながら調査を進めていきたいと思います。

「夢と謎のままにしておくのもロマンがあっていいですね。」こんな声も聞こえてきます。

「上地町字岳井七番地」。これは、先に紹介した「上地地籍字分全図」で記されていた「一本杉」の場所です。区画整理組合理事の両畔柳さんのご案内で現在地を訪ねてみました。

「ここですよ。ここに一本杉はあったのです。」

「伐採」に当たられた市太郎氏が、「やっとかめに、ここに来ましたよ。」と、感慨を込めて話されました。五年前の開発途上の上地地区を思い出されたのか、寒さを忘れるような「興奮」が伝わってきます。

「現地」訪問があってから、一月の終わりに、「一本杉」のあった番地「岳井七」に住んでみえる福田清美さんが来校されました。福田さんは、今年度上地小学校ＰＴＡ文化部長で新聞発行などを通して旺盛な活動を進めて下さっています。話が「一本杉」に及ぶと、満面に笑みを浮かべて言われました。

「私は、学校から配られる「ふるさとシリーズ」に登場する場所を全部歩いて、自分の目で確かめるようにして来ました。先生から、一本杉が自分が今住んでいる屋敷内にあったことを教えて頂き、こんな名誉なことはないと喜んでいます。白いヘビがいたなんて、とっても縁起がいいですね。私も、信太郎さんをお訪ねして、詳しく調べてみたいです。ぜひ、紹介をお願いします。」

それから数日後、お届け下さったのが、「一本杉」の現在地を伝える次の写真です。今回の調査が契機となって、更に一本杉の「謎」解明が進み、大きく夢が広がっていくことを期待してやみません。

「一本杉」があった場所の現在地

百年前の「上地学校」

9、百年前の「上地学校」

昨年の十二月号のＰＴＡ新聞「上地」には、こんなふうに書かれています。

「今から百年ほど前に、【上地学校】という小学校がありました。旧国道二四八号線から東海道本線寄りに西に入った場所です。貴船神社があり、字名は下屋敷と呼ばれています。この神社の東隣り、現在は倉庫の建っている所です。明治十三年三月二十八日に創立され：：：：：」

学校では「開校五年目」を記念して、「とべ、上地っ子」像を設置したり、校歌を作成したりして祝ったところです。しかし、右の新聞記事「ふるさと上地ある記」でも紹介したように、実はすでに百年前に、わずか七年間だけではありましたが、「上地学校」があったのです。この時期から計算をすれば、上地小学校の歴史は百年前に始まっていたことになります。ここでは、当時の上地地区をとりまく社会の状況にも目を向けながら「上地学校」を訪ねてみたいと思います。

一、「学制」の発布

「上地学校」は「学制」が発布されてから八年後の明治十三年（一八八〇年）に設立されました。我が国近代教育の出発点となった明治五年（一八七二年）の「学制」当時は、どのような状況にあったでしょうか。

「学制」は「仰出され書」に書かれていたように「自今以後、一般の人民、かならず邑（むら）に不学の戸なく家に不学の人なからしめざるべからざるものなり」という意図で制定されました。こうして、全国を八大学区に分け、区ごとに一大学を置きました。そして、各大学区に三十二の中学区を設け、各中学区には二百十の小学区を設定しました。この小学区は、一つで人口六百程度を単位とすることにしました。

「学制」は、江戸時代から続いていた「寺子屋」や「郷学」に変わる義務教育制度を確立させるものでしたが、その費用は全額受益者（保護者）負担を原則に掲げていました。発足当時の「月謝」は子ども一人につき五十銭までとしていました。

明治十一年の一人当たりの月平均の所得が一円七十五銭でしたから、保護者にとっては大変な負担でした。その上、この時代では、家庭にとって子どもが大事な「労働力」でした。この「負担」と「労働力」の二つが影響し合って、学校に行く子どもの率は極めて低いものでした。

一一、低かった「就学率」

「上地学校」が設立された翌年、明治十四年（一八八一年）小学校に在籍していた二百六十万人の子どもの平均出席率は六十五パーセントでした。こうしてみると、全国で毎日九十二万人が欠席していたことになります。また、子どもの十パーセントを越える二十八万人は一日も登校していなかったと言われています。

こうした状況を憂えた明治政府は「仰出され書」の中で「幼童の子弟は男女の別なく小学に従事せしめざるものは、その父兄の」落ち度だとして就学の督促をしています。学校へ行っている子どもには「就学」バッジをつけさせたり、警察官が就学を促して家庭を回ったりもしていました。

こうした様々な対策を打ちながら、政府は明治十二年になると、「学制」にかわって「自由教育令」を発布しました。就学義務年限を今までの八年から一挙に四年に短縮したり、授業料徴収の自由化などの改正をはかる目的をもった改革に乗り出したわけです。しかし、この「自由化」によって、「学制」の下で大きな経済的負担をしてきた町村の中には、廃校するところが続出してしまいました。

そこで、政府は翌年の明治十三年、再び「改正教育令」を制定しました。教科内容の規制・学務委員の公選制

廃止・教則に対する府知事や県令の編成権・年間最低就学を十六週とするなど、やや統制色の濃いものでした。続いて十四年、文部省は「小学教員心得」を「教育の目的はもっぱら尊王愛国の志気を振起せしめるにあり、教員は生徒をして皇室に忠にして国家を愛し、父母に孝にして長上を敬し、朋友に信にして卑幼に慈し、および自己を重んずる等、おおよそ人倫の大道に通暁せしめるを任とすべし」と規定しました。

更に、明治十九年には「小学校令」が公布され、その目的は「良き人物を作るを以って第一とし」「教育の主眼は良き臣民を養成するにあり」と明確にされていきました。

一八七二年（明治五年）	学制発布（八月）
	額田県が廃止され愛知県に合併（十一月）
一八七五年（明治八年）	上地村と大谷村が合併して上地村誕生（十月）
一八七七年（明治十年）	西南戦争（二月～九月）
一八七九年（明治十二年）	靖国神社建設（六月）
	学制を廃止し自由教育令発布（九月）
一八八〇年（明治十三年）	上地学校開設（三月）
	改正教育令発布（十二月）
一八八一年（明治十四年）	小学校教員心得制定（六月）
一八八二年（明治十五年）	上地学校改築（二月）
一八八六年（明治十九年）	師範学校・中学校・小学校令発布（四月）
一八八七年（明治二十年）	上地学校が福岡学校に合併し、坂崎学校は福岡学校の分教場になる（四月）

当時の沿革（福岡小一世紀誌より）

三、上地町下屋敷八十一番共有地

「上地学校」は愛知県三河国額田郡上地村共有地にありました。現在の上地町下屋敷にある「貴船神社」の東隣です。この下屋敷は、旧国道二四八号線の西側です。そのすぐ西には、ＪＲ東海道線が通っていますが、大変落ち着いた環境に恵まれています。

「上地村」地図で見る「上地学校」所在地

「貴船神社」の境内

この地域は福岡町の土呂の東の端につながっていきます。一方、現在の上地小学校学区は藤六・薬師・向山・山の上等を除けば、かつては田畑や山林でした。しかし、昭和五十一年から始められた上地地区の区画整理によって埋め立てられ、山林はほとんど削られて見事な新興住宅地に生まれ変わってしまいました。

村の中にある神社の多くは、その地域の人々にとって、かけがえのない精神的な支柱となってきました。貴船神社の境内とでもいう位置に建設された「上地学校」は、明治の新時代を迎えた、当時の上地村の人たちにとっても、教育だけでなく文化の中心としての存在だったと思われます。

「上地学校」があった周辺の上地町地図

四、額田郡上地村第九番小学

「上地学校」は、明治十三年（一八八〇年）三月二十八日に、「第二大学区内愛知県下第八番中学区内額田郡上地村第九番小学上地学校」として設立されました。

これより前には、上地村には小学校とよばれるものはありませんでした。上地から約六百メートルほど離れた福岡村に「第二大学区内愛知県下第八番中学区内額田郡福岡第六十四番小学福岡学校」がありましたが、学区制の都合上、子どもたちは約千メートル南の位置にあった「坂崎学校」に通学していました。

しかし、「坂崎学校」への通学は、「上地学校設立願」によると、次のような悪条件の下にありました。

「日々寒暑ヲ不論通学致シ里程遠隔ニ而且所々急流之深川之猶又時々風雨之難ヲ負ヒ其患ヲ受ケ」ていました。

そこで、「坂崎学校一時分離相願当村ニ於而学校設立支度村中協議相整候ニ付坂崎学校委員及熟談候処協議相逐ヒ依テ双方学務委員連署ヲ以テ」愛知県に設立を願い出て許可を得ることになったのです。

右当村之義ハ従前坂崎学校聯合村ニ相成居候　然ル処当村生徒之義ハ本校ヘ日々寒暑ヲ不論通学致シ里程遠隔ニ而且所々急流之深川有之猶又時々風雨之難ヲ負ヒ其患ヲ受ケ候故ニ村中之人民配苦之段不得止義ニ付依之坂崎学校一時分離相願当村ニ於而学校設立仕度村中協議相整候ニ付坂崎学校委員及熟談候処協議相逐ヒ依テ双方学務委員連署ヲ以テ此段奉願申候也

明治１３年辰２月４日　右村学務委員
小林善四郎
野沢与三右衛門
本多嘉一郎
戸長
本多熊吉
坂崎村学務委員
平岩兵吉

愛知県令安場保和殿

「上地学校設立願」

「上地学校設立許可書」

五、上地学校「開校」

愛知県への「上地学校」設立願いが提出されたのは、明治十三年の二月四日でしたが、それから、わずか五十日後の三月二十八日に「開校」されています。

このような短期間に開校することができたのはどうしてでしょうか。上地第一区画整理組合副理事長の畔柳市太郎さんにお尋ねしたところ、「祖父が以前からあった建物の一部を利用して建てたのではないかと言っていたが……」と記憶をたどって下さいました。五十日後のスピード「開校」の謎は、「岡崎市史近代下」で解くことができました。

「愛知県額田郡各小学校明治十三年後半期試験一覧表」の中に「上地・旧郷蔵公有……」とあるのです。そうです。上地学校は「旧郷蔵」をそのまま使ったために、わずか五十日という準備期間で「開校」にこぎつけることができたのです。

この頃の額田郡には、本校・分校合わせて五十八ありました。その中で、新築は二十一校で残りは寺院等の借用が二十校、民家が十三校、村社の借用が三校、郷蔵は一校でした。この一校が、我が「上地学校」だったのです。上地村の教育は、まさに、この「郷蔵」から始まったのでした。

六、校舎増築

上地学校は明治二十年（一八八七年）に愛知県額田郡尋常小学福岡学校に合併され、七年間の「短命」に終わるのですが、開校すると、早くも二年後には増築されています。それは、明治十四年七月に「督責法」が出されてから子どもたちの就学率が急増して教室が足らなくなったからです。この法律によって、各地区の学務委員・

学事取締・警察などが子どもたちの出校を促して各家庭を回って歩いたと言われています。

増築の理由を「増築祝辞」に見てみましょう。

「明治十四年七月督責法降ルヤ　学務委員諸君等勤励シ　学生日ニ月ニ増加シ　教場狭隘ニシテ　生徒ヲ容ルニ能ハサル」ため「一村協力シテ」という次第でした。

督責法が出される以前の上地学校の就学率は男子が約六十三～八十五パーセント。女子が約二～十七パーセントで、全体の平均は三十八～四十九パーセントでした。この数字は、当時の全国の就学率とほぼ同じになっています。法が実施されると、状況は急激に増加に向かっていきました。男子が九十三パーセントに、女子の場合は一気に六十一パーセントに増加し、全体でも四十パーセント台から七十一パーセントになりました。督責法の果たした役割がいかに大きかったかが分かります。

祝　詞

日月ノ過ヤ駒ヤハ奔流ヲ下ルカ如ク学ノ進ミ難キハ急流ヲ測ルカ如シ余當校ニ職ヲ受ケ明治十三年五月創開校ノ式ヲ行ヒシヨリ既ニ二年ヲ経過スト雖モ未ダ学校設置其ノ宜レカ全備スルニ赤ス事能ハス抜ヘレガ整頓スルニ非ズ然レドモ戸長学務諸君ノ盡力厚キニ因リ村民熱学暴ニ走シ従テ生徒モ時々逆歩ノ激ヲ既ス　ノ如クニハ洋々タル水源ニ達スルモ亦遠キニ非ザルモ寸毫モ既ヒヲ容レザルナリ然ルニ明治十四年七月督責法降ルヤ学務委員諸君等　勉励シ学生日ニ月ニ増加シ教場狭隘ニシテ生徒ヲ容ルニ能ハサルヲ憂リ一村協力シテ増築ノ功ヲ奏スルヲ得タリ実ニ社事ノ見リナラズヤ然リ而シテ余カ見ル所ニ因レハ百ノ事業未タ言其ナルニ非ス緒ヲ以テ諸君等僅少ノ事業ニ安ンセス　々勉々止ムナクンバ教育ノ実績ヲ見ルモ亦既　可ナリ将来嘱望ム此校ノ生員等見リ寸行ヲ怠ミ学業ヲ進セ　余ヲヒヒシキモ教育ノ言ヲ受ケ此庸ニ利スルヲ得数ヒ怪ミナシ　既同ヲ祝シテ祝ス

明治十五年二月廿四日

上地学校六等訓導
大津　馬次郎

「上地学校」増築式の祝辞

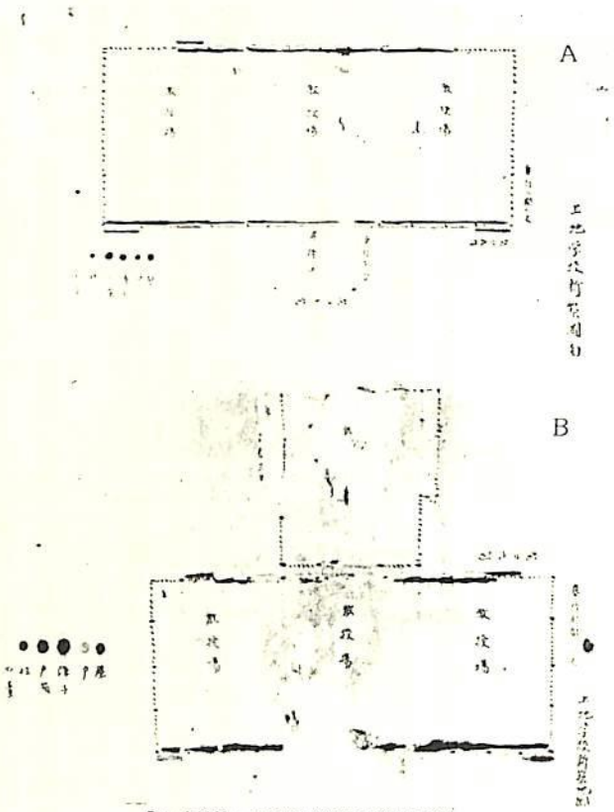
年・月	男	女	全体
明治13．5	79．7	2．4	48．0
6	79．7	2．4	48．0
7	79．7	2．2	45．7
8	80．0	6．4	47．7
9	80．0	6．4	47．7
10	81．4	6．4	48．1
11	73．8	8．7	46．8
12	77．8	8．7	48．6
明治14．1	84．5	10．9	47．4
2	76．4	12．5	42．5
3	72．7	14．6	41．6
4	64．4	14．6	38．5
5	62．7	16．3	38．1
6	68．3	16．7	45．4
7	92．9	60．9	71．4
8	92．9	60．9	71．4
9	91．1	62．2	71．2
10	94．3	13．3	58．3
11	96．2	56．8	78．4
12	94．7	58．5	79．6
明治15．1	93．0	52．0	73．8
2	93．0	68．6	81．5
3	93．3	68．6	82．0
4	92．9	68．6	81．3
5	86．4	66．7	77．0
6	86．7	65．5	76．5
7	86．4	66．7	77．0
8	86．0	67．3	76．8
9	84．5	66．1	75．4
10	84．5	66．1	75．4
11	83．3	66．7	75．2
12	82．0	66．7	74．6

「上地学校」就学率（数字は％）

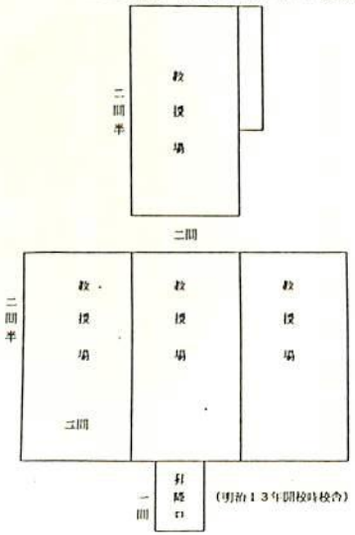
七、二種類の学校平面図

上地学校の平面図が二種類残っています。おそらく、Aの方が明治十三年（一八八〇年）の開校時のもので、Bの方が明治十五年の増築時のものだと思われます。

両方を比較してみると、Bには、以前からあった建物の南側に間口二間・奥行二間半の十畳の部屋に間口一尺五寸・奥行一間半の廊下がついた新しい建物が造られています。これが、「増築」された部分でしょう。



「上地学校」平面図（福岡小学校所蔵）



（明治13年開校時校舎）

「上地学校」平面図

郷蔵を改造して造られた明治十三年の校舎は、北側に間口・奥行とも一間の昇降口があり、それに続いて間口六間・奥行二間半の教授場（教室）があります。教授場は間口が二間ずつに仕切られ、十畳ずつの三つの部屋になっています。

先の畔柳市太郎さんのお話によると、教授場の床は厚さ八分ぐらいの杉板が張られていたようです。また、現存する図面からだけでは、確実な判断はできませんが「中二階建て」ではないかと思われます。郷蔵を改造した校舎ということから見れば、市太郎さんが祖父から聞かれたというお話は事実を伝えたものと考えられます。

八、鬼瓦の銘

福岡小学校に所蔵の鬼瓦

現在もお隣の福岡小学校に「上地学校」の鬼瓦が保存されています。幅約七十センチメートル、高さ四十センチメートルの大変立派で重みのある瓦です。その側には「明治十四年　己旧八月十五日」とあります。この時期は、上地学校開校から約一年半後・増築半年前にあたります。これは、どうしてでしょうか。

開校時には、とりあえず、郷蔵のままの瓦を使い、上地学校の鬼瓦ができた時に葺きかえたのではと思われます。貴船神社からわずか五十メーチルほどしか離れていない佐藤四郎氏宅（上地町宝六の二番地）の屋根瓦にも、福岡小学校保存のものとは形は違いますが、今も使われています。佐藤さんの祖父の時代に、上地学校の校舎が解体され、それをもらい受けて屋根を葺いたということです。

また、貴船神社からおよそ百メートル離れた上地町荒井九十九の一番地、鈴木秋男氏宅の屋根にも上地学校の瓦が使われています。

校舎こそ、全く跡形もなくなっていますが、学校を象徴する鬼瓦が現在も残っているのです。上地学校建学の精神が脈々と生き続けている思いがします。

九、児童数は百名

上地学校は男子五十九名、女子四十一名で発足しました。その後、若干の増減はありましたが、およそ百名から百二十名の間でした。最も少なかったのは明治十四年（一八八一年）十月で男子五十三名・女子四十三名の計九十六名でした。最も多かったのは明治十五年十二月の男子六十一名・女子五十七名、合計百十八名でした。

年・月	男	女	合体
明治13．5	59	41	100
6	59	41	100
7	59	46	105
8	60	47	107
9	60	47	107
10	59	47	106
11	65	46	111
12	63	46	109
明治14．1	58	46	104
2	55	48	103
3	55	48	103
4	59	48	107
5	59	49	108
6	60	48	108
7	56	46	102
8	56	46	102
9	56	45	101
10	53	43	96
11	53	44	97
12	57	41	98
明治15．1	57	50	107
2	57	51	108
3	60	51	111
4	56	51	107
5	59	54	113
6	60	55	115
7	59	54	113
8	57	55	112
9	58	56	114
10	58	56	114
11	60	57	117
12	61	57	118

「上地学校」児童数（数字は人数）学令外児も含む

上地学校長
大　津　島次郎

手にした資料には、明治十五年二月までのものしかないため、その後の増減ははっきりとしません。しかし、「福岡学校」に合併されるまで、あまり大きな変動はなかったでしょう。

十、先生はただ一人

上地学校の先生は校長大津嶋次郎ただ一人でした。この先生は、額田郡大平村二二五番地に住まわれていました。開校の年、一月二十九日に愛知師範学校を卒業したばかりの二十二才の「青年教師」でした。初めての任地であった「上地学校」の教育に、その若さあふれる情熱を傾注されたのです。

他に助教（助手）として、鶴森智梁・辻村貞次郎・成瀬彦三郎・鈴木藤四郎の四人が非常勤で学校教育に参加していました。児童数が百名内外ではありましたが、実質の就学率が低かったので先生一人で間に合ったのではないかと思われます。

「小学修身」教科書

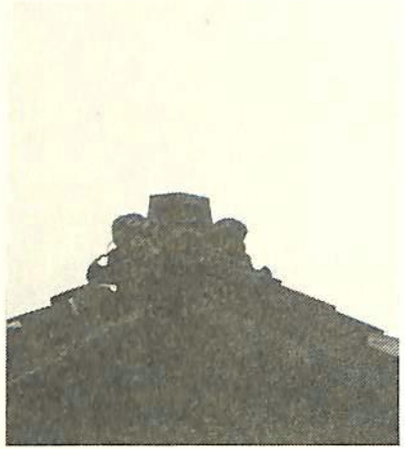
「愛知県地理」教科書

十一、「寺子屋風」授業

畔柳市太郎さんのお話によれば、「教授場では杉板張りの床の上に机や椅子を並べた寺子屋風の授業」が行なわれていました。子どもたちの持っている教科書は、「修身」と「地理」だけで、多くの場合は明治の時代によく使われていた「掛図」によって授業が進められていました。

現存する資料が極めて少ない状況のため、初代「上地学校」の全容を浮び上がらせることができませんでしたが、その一端でもうかがい知ることができたなら幸いです。福岡小学校の近藤豊教頭先生を初め、福岡学区の皆さんに多大なご協力を賜わり、やっとここまでの調べができました。

この記事を読まれた方々から、更に多くのご教示を頂けることをお願いして一応の終わりとします。



佐藤四郎宅の鬼瓦

「上地学校」校印（第一公民館に保管）

ふるさとの「方言」を訪ねて

10、ふるさとの「方言」を訪ねて

今年度の初め、本校保護者の皆さんの出身県を調べさせて頂きました。その結果、予想はしていたものの、新興地域の著しい特色を見ることとなりました。大まかな状況を記してみます。（実家庭数は五九一戸。調査にご協力を頂いた保護者数は一一八六人です。）

愛知県内　岡崎市内の出身者数　三五六人　愛知県の合計　六八三人（五八％）
　　岡崎市外の出身者数　三二七人

愛知県外　福岡県　三二人
　　静岡県　三二人
　　熊本県　二八人
　　鹿児島県　二六人
　　三重県　二六人　上位十県の合計　二四四人（二〇％）
　　岐阜県　二六人
　　長崎県　二三人
　　宮崎県　二三人
　　広島県　一四人
　　東京都　一四人
　　その他の道府県　二五九人（二二％）

これらの調査から本校の保護者の出身県は、山梨県と沖縄県を除いた全国の都道府県に及んでいることが分かりました。まさに、「全国区」と言えましょう。

昭和63年2月9日

保護者各位様

上地小学校長　嶋田 稔

ふるさとの「方言」調べについて

余寒厳しい折、保護者の皆様には如何お過ごしでしょうか。去る7日の学芸会には、多数のお出かけを頂き誠にありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

さて、開校5年目を迎えた本校は地域の皆様とのふれあいを深める学校づくりに力を注いで参りました。今年度初めに、ご協力を賜わり調べさせて頂いた結果、保護者の皆様の出生県は、山梨・沖縄を除く全国に及んでいることが分かりました。まさに、本校は「全国区」の状況にあります。それぞれの出生県に見られる「ふるさと」の尊い伝統をもって、この上地に居を構えておられることと存じます。

学校も、及ばずながら、「ふるさとシリーズ」の発刊など、学区内の価値ある伝統や史跡を訪ねる努力をしてきました。こうした、「ふるさと」づくりへの歩みを更に発展させていくため、このたび、皆様の出生県や地域での特色ある「方言」集めを試みたいと思います。下記のような要領でお書き頂き、2月15日までに担任にご提出下さい。

―記―

……きりとりせん……

1、次の言葉をあなたの出生県・地域ではどのように話しますか。

①ごはんなどを食べる時に言う挨拶

「いただきます。」 → 「　　」

「ごちそうさまでした。」 → 「　　」

②人との挨拶

「おはようございます。」 → 「　　」

「こんにちは。」 → 「　　」

「さようなら。」 → 「　　」

「こんばんは。」 → 「　　」

「おやすみなさい。」 → 「　　」

2、次のものの名前をあなたの出生県・地域ではどのように呼んでいますか。

①かたつむり → 「　　」

②かぼちゃ → 「　　」

③とうもろこし → 「　　」

④しもやけ → 「　　」

⑤めだか → 「　　」

3、次の会話をあなたの出生県・地域ではどのように話しますか。

（母親）

「今日は宿題があるでしょう。夕ごはんの前に早く済ませなさいよ。」↓

「　　」

（子供）

「はい。今、見ているテレビが終わってからやります。」↓

「　　」

※面倒な「方言調べ」にご協力をありがとうございました。このほか、上地っ子に参考となる異色の「方言」がありましたら、下の枠内に記入下されば幸いです。

（　　）年（　　）組　児童名（　　）

保護者出生県・地域名（例―愛知県・岡崎市―　　）

ご自由にお書き下さい。

それぞれの出身県で、地方独特の伝統や生活習慣を身につけた方たちが、この上地の地を「第二のふるさと」として居を構えられることになったのです。上地学区は誕生して五年目、若くて歴史の浅い地域です。それだけに上地は「これからの町」とでも言えるでしょう。

保護者の出身県が全国に及んでいる特別な条件を考え、二月の初旬に「ふるさとの方言調べ」を全家庭にお願いしました。そうしたところ、ほとんど実家庭全戸の方々が趣旨に賛同され別紙の用紙に細かくご解答を頂きました。

「生まれ故郷を思い出しながら夫婦で楽しいひとときを過ごすことができました。」

「ようやく、三河ことばが分かりかけたこの頃です。上地ことばにもだんだん慣れてきました。」

「調査の結果が早く出るのを待っています。」

など、調査への感想と期待を込めたお便りも多く目にとまりました。「ふるさとの方言調べ」の概要をまとめてみましたので報告をさせて頂きます。紙面の都合から、都道府県で一つだけの「方言」を掲載しました。愛知県の例を引くまでもなく、県内でも東三河と西三河、尾張と名古屋などでかなりの違いがあります。

「あのねえ」という言葉も、東三河では「あののん」、名古屋や尾張では「あのよう」、私たちの岡崎など西三河では「あのなあ」と分かれているのが現実です。

皆さんからお寄せ下さった解答用紙を詳細に見させて頂き、同じ県の中でいくつもの「方言」を発見することができました。そして、その地域性が細やかな分布状況にあることを改めて理解できました。こうした事情からこのまとめでは、同じ県内でも、できるだけ共通することが多い言葉を選ぶように配慮しました。

この報告が契機になって、「ふるさとの方言」への関心が更に高まり、温かな「ふるさと」の会話が家庭や地域の中で交わされていくことを願ってやみません。

一、「ふるさとの方言」―あいさつ―

「ふるさとの方言」地図には、「さようなら」だけを記しましたので、ここでは、食事にかかわる挨拶と人との挨拶について紹介します。

・食事の挨拶

「いただきます。」……新潟県　「よばれます。」
鹿児島県「いただきもす。」

「ごちそうさまでした。」……富山県　「おっきゃしたっけ。」
熊本県　「はやんたあー。」
岡崎市　「ごっつおうさん。」

・人との挨拶

「おはようございます。」……青森県　「おはよごし。」
長長県　「おはようかした。」
富山県　「おはようございます。」
宮崎県　「はえのう。」
長崎県　「おはようごんす。」
鹿児島県「おやっとさんでごわす。」

「こんにちは。」……新潟県　「はいこんちょ。」
長野県　「おるかいや。」
富山県　「まめでおらっせ。」

岐阜県　「まいどさん。」
三重県　「まめなかい。」

「さようなら。」……青森県　「へばな。」
秋田県　「さえなら。」
新潟県　「あいよう。」
長野県　「あばな。」
岐阜県　「せえなら。」
岡山県　「さいなら。」
長崎県　「あっぱ。」「およけんさい。」
鹿児島県「あしたごあんそー。」

「こんばんは。」……青森県　「おばんです。」
秋田県　「はげなたんすな。」
宮城県　「おばんでがす。」
鳥取県　「ばんなりました。」「ばんじまして。」
鹿児島県「こんちばらした。」奄美大島「おがみしような。」

「おやすみなさい。」……青森県　「やすみへ。」
富山県　「やすまっせのう。」
鹿児島県「おやっとさあ。」

二、「ふるさとの方言」―物の名前―

「ふるさとの方言」地図では、めだかとかぼちゃだけを記しましたので、ここでは「かたつむり」「とうもろこし」「しもやけ」を紹介します。

「かたつむり」……香川県「まいまい」
広島県「まいまい」
「とうもろこし」……秋田県「きみ」
宮城県「とうきみ」「とうみぎ」
山形県「とうきび」
新潟県「きび」
石川県「なんばきび」
岐阜県「こうらい」
滋賀県「とわ」
徳島県「とうきび」
大分県「とうきび」
鹿児島県「よめぞときび」
「しもやけ」……滋賀県「ゆきやけ」
岡山県「しもぶくれ」
高知県「あかぎれ」
山口県「かにやけ」

三、異色の「ふるさと方言」

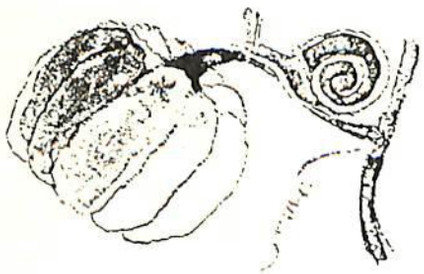
調査のお願いの末尾に「このほか、上地っ子に参考となる異色の方言がありましたらご記入下さい。」と書きましたが、大変な数にのぼるご紹介を頂くことができました。その中から、いくつかを皆さんと共に味わってみたいと思います。

「バカ」いろいろ……富山県　「だら」（男に対して）
「べしょ」（女に対して）
「だらべしょ」（最悪のバカに対して）

「だいきらい」……熊本県　「いっちょんすかん」
「行きました」……宮崎県　「おじゃんした」
「まぶしい」……三　河　「ひずるい」
「違う」……岐阜県　「いんね」
「いくじなし」……鹿児島県　「やっせんぼ」
「くさっている」……静岡県　「すえてる」
「自分の家」……長崎県　「えんち」「おんがた」
「何をしているの」……福岡県　「なんしょうと」
「よい子」……佐賀県　「もんもんちゃん」
「気をつけて」……石川県　「ころばっしゃなあ」
「冷たい」……北海道　「しゃっこい」
「早くいらっしゃい」……山口県　「はようきんかい」

「具合が悪い」……高知県　「のうがわるい」
「だめだよ」……岡山県　「おえんがな」
「帰りましょう」……和歌山県　「いのら」
「くすぐったい」……青森県　「もちょこい」
「おいしいでしょう」……群馬県　「うめえだんべえ」
「手伝う」……鳥取県　「手ごする」
「ありがとうございました」……熊本県　「ちょじょだんだん」

四、岡崎地方の「ふるさと方言」



「私たちは鳥取県からやって来ました。岡崎地方の方言がまだよく分かりませんので、この機会にぜひ教えて下さい。」

「こちらにやって来てまだ間もない頃のことでした。この地方でできた友だちと、行こうかどうしようかと言い合っていて、『行こまい』と言われました。その時、私一人だけ逆方向に歩き出して大笑いされた思い出があります。『行こまい』を行くのはよそうと思ったからでした。これも、今となっては楽しい思い出です。」

今回の調査用紙の中に、このようなご希望や「失敗」談がいくつも含まれていました。また、大好評のうちに終わった先の学芸会について、京都から転校してきたばかりの三年生中山実沙子さんは次のように感想を話してくれました。

「どれもこれもみんな上手やった。すごく上手で京都の先生に教えてやらんといかんわ。」

中山さんも、今、きっと失敗を重ねながら、担任の松野先生や学級の友だちから「第二のふるさとの方言」と

●今日は宿題があるべさ。晩げまんまの前に早くやってえ。
うん。今、見でるテレビあ終わったらやるして。

●今日宿題あるだんべ。晩ごはんの前さ早くやんだ。
うん。今さ、見でるテレビさ終わってからやっから。

の前に早くやってしまれ。
、これが終わってからやる。

青森
秋田
岩手
宮城
山形

け。夕はん前にはよやりなよ。
しまいたらやるすけ。

く済ませるのだに。
うやるに。

新潟
福島

●今日は宿題あるんだろう。夕はんのめえに早くやっちゃいなよ。
うん。今、見ているテレビが終わったらやるよ。

れよ。
。
まっし。

栃木
群馬
茨城

●今日は宿題があるだんべえ。夕はん前にやっちゃいな。
うん。今、見でるテレビが終わったらやるよ。

富山
長野
埼玉
千葉
石川
東京
山梨
神奈川
福井
岐阜
よ。
いや。

●今日は宿題があんですべ。夕ごはんの前（めえ）に早くやんなせえよ。
うん。今、見でるテレビが終わってがらやるよ。

●今日は宿題があるやらー。晩ご飯の前に早よう済ませやあよ。
はい。今、見とるテレビが終わってからやるわ。

愛知
静岡
京都
滋賀
兵庫
大阪
三重
奈良
和歌山

●今日、宿題あるとやろ。夕ご飯の前にはようしとかんばよ。
はい。今、見とるテレビが終わってからするけん。

●今日は宿題があるんやろ。夕ご飯の前にはよせんとあかんやろ。
うん。今、見とるテレビが終わったらやるに。

●今日は宿題があるやろ。晩ご飯の前にはよしなさい。
はい。今、見てるテレビがしもてやるわ。

●今日は宿題があるやろ。夕ご飯の前にはよ、済ましてしまいや。
はい。今、見ているテレビが終わってからやるわ。

●今日は宿題があったやろ。お夕はんの前にはよやりなあよ。
はい。今のテレビが終わったらやらよ。

は宿題があるやろ。夕ご飯の前に早く済ましてしまいなはれ。
見ているテレビが終わったらやるんか。

うるんだろ。晩ご飯の前にはよせんといかんよ。
見ようテレビが終わったらすぐやるけん。

あるんやろ。晩ご飯の前にはよ済ましちょきや。
よるテレビがすんだらやるわ。

か。晩ご飯食う前に早うやりや。
や。今、テレビ見ようき。これが終わってからやるき。

●今日、宿題あるべ。ばげのまま
うん。今、テレビ見ているがら

ふるさとの方言

標準語

「今日は宿題があるでしょう。夕ごはんの前に早く済ませなさいよ。」

「はい。今、見ているテレビが終わってからやります。」

６３年２月調べ

●今日は宿題があるす
はい。今のテレビが

●今日は宿題があるんずら。夕はんの前に
はい。今、見ているテレビが終わってか

●今日は宿題があるがけ。夕飯の前にし
分かった。テレビが終わったらやるち

●今日は宿題があるんやろう。夕ご飯の前に早う済ませ
はい。今、見とるテレビが終わってからやるわいね。

●今日は宿題があるやろ。夕飯の前に早くやらんとあかに
うん。今、見ているテレビが終わってからやるうー。

●今日は宿題があるやろ。夕飯の前に早ようし
はい。今、見てるテレビがすんだらするしな

●今日は、宿題があるやろ。夕ご飯の前に早う済ましいな。
はい。今、見とるテレビが終わってからやるわなあ。

●今日は宿題あったんじゃろう。夕めしの前に早ようすまさにゃあ。
はい。今、見とるけん、テレビが終わったらやるがー。

●今日は宿題ああへんかや。晩めしまでに早かたずけてしまえやい。
うん。今、見ちょうテレビが終わってからやあけん。

●今日は宿題があるんじゃろ。晩ご飯の前に早よう済ませんさいよ。
はい。今、見よるテレビが終わったらやるけー。

●今日、宿題があろうがあ。夕飯までに早うやっちょきなさいよ。
うん。今、テレビ見ちょるき、これが終わったらやるばい。

●今日は宿題があるんじゃろう。夕ご飯の前に早くやってしまい。
はい。今、見よるテレビが終わってからやる。

●今日は宿題があるとやろー。夕ご飯の前にはようせんね。
うん。今、見ようテレビが終わってからやるけん。

●今日は宿題があっとだろもん。晩ご飯の前に早よ済ませんと。
はい。今、見ちょるテレビが終わってからやっとよ。

●きは宿題があっどが。晩ご飯の前にゃはよ終わらせにゃ。
えい。今、見ちょるテレビが終わってからやるわ。

●今日は宿題があっとやろ。晩めしの前に早ようやれ。
今、テレビがおもしろかけん、後でやる。

●今日は宿題があっとじゃなかか。ご飯の前に早よ済ませないかんど。
はい。今、見とうテレビが終わってからやってな。

●今日
今、

●今日宿題
うん。今、

●今日は宿題が
はい。今、見

●今日は宿題ないが
うん。分かったち

なる「三河弁」を「習っておる」ことでしょう。

そこで、以下、「ちいとだけ」（少しだけ）書いてみたいと思います。

「寒い」……「さぶい」　「やりなさい」……「やりんね」

「そうだね」……「ほうだな」　「しなさい」……「しりんよ」

「あたたかい」……「ぬくとい」　「行ってきなさい」……「行っといでん」

「そんなのやめよう」：「ほんなんやめまい」　「そうでしょう」……「ほうだらあ」

「いけないよ」……「あかんじゃんか」　「久しぶりだね」……「やあっとかめだなあ」

「いいでしょう」……「いいじゃん」　「行きません」……「行きゃあへん」

また、宿題についての親子の問答を上地学区老人クラブ会長の辻村正さんに「実演」をして頂きました。生まれも上地、そして定年まで岡崎市で教員生活をされた、いわば、きっすいの「三河人」です。「三河弁」まるだしの「上地ことば」をお聞きください。

辻村　正さん

母親　「今日は宿題があるだらあ。晩ごはんの前にはよやっちゃえよ。」
子ども「うん。今、見とるテレビが終わっちゃったらやるわ。」

「ほや、こいでいいと思うがなあ」
「ほだよ、ほいで、間違いないぞん。どうだん？」
「ほやあいいだぞん。間違っとらんぞん。」

時ならぬ、「三河弁」が飛び出し始め、「いっぺんに」職員室が賑やかになっていきます。校長先生と教頭先

生が話に加わりました。

「ふんとう」（本当）「よがむ」（ゆがむ）「むらう」（もらう）「落といた」（落とした）など「三河弁」は必ずしも美しい言葉ばかりではありません。しかし、やはりここにも、私たちは「ふるさと岡崎」「ふるさと上地」を感じているのです。全国の都道府県から集まって来られた皆さんが、「上地ことば」をますます個性豊かに継承・発展していかれることを念じて、この報告を終わりたいと思います。

昔話、方言＝訛（なま）りと標準語との対照

1. ほ（い）で・ほ（い）だで・ほの・ほ（い）から・ほいじゃ（あ）・ほ（り）ゃ・ほこ・ほ（う）・ほんな・ほ（う）か・ほいつ・ほれ・ほしたら・ほして（も）……それで・それだから・その・それから・それでは・そりゃ・そこ・そう・そんな・そうか・そいつ・それ・そうしたら・そして（も）
2. ～だけん……～だけれども
3. ～だら（ゃ）……～だろう
4. ～どった……～でおった
5. ちいと……ちょっと、少し
6. こやーま……これはまあ
7. こんなん……こんなもの
8. とらまる……捕まる
9. まんだ……まだ
10. ～もんで・～もんだ（で）……～ものだから
11. ～（た）で・～だで……～（た）ので
12. ～けん（ど）・（が）……～けれども
13. つるくいとく……つるしておく
14. ～ちゃった……～てしまった
15. ～くんな……～下さい
16. ほうせるとさいが……そうすると
17. ～だげる……～であげる
18. ～てって……～と言って
19. ちょうらかす……あざける、からかう
20. いっくら……いくら
21. くりょ（う）……くれよ
22. ゆったで……言ったので
23. ちゅ（う）……と言う
24. ち（ゅ）って……と言って
25. （お）くれん……下さい
26. ～んでも……～なくても
27. ～ちゅっちゃあ……～と言って
28. ～とる……～ておる
29. まっと……もっと
30. けども……けれども
31. やだ……いやだ
32. ～てった……～と言った
33. よう……よく
34. くべる……燃やす
35. ほいだもんだ……それだから
36. しといたげた……しておいてあげた
37. ～（と）さいが……～したところが
38. ま……まあ
39. えらからあ……大変だろう
40. 呼ばれえ……どちそうになろう
41. ～らあ……～ろう
42. とんま……まぬけ
43. ゆっといた……言っておいた
44. どいで……どうして
45. だ……のだ

「新編岡崎市史　史料民俗１９」

付録　昭和六十二年度上地小学校の歩み

―「学校だより　上地」―

上地

二本の足

ー嶋田稔校長就任ー

開校五年目の春、野田守司登校長の後任として四月一日、嶋田稔校長が就任しました。「学校だより」に、次の原稿を寄せて頂きました。全文を紹介いたします。

こんど、上地小学校に勤めさせていただくことになり、大変喜んでおります。

私は、次のことを考えておりますので、御理解いただき、御協力をお願いする次第です。

まず第一に、先代野田校長先生はじめ諸先生、御父兄、学区の方々の開校の苦労をしのび、それを無にしないようにしたいと思います。

そのためには「心豊かに力いっぱいやる子の育成」という本校の教育目標をさらに充実させることが必要と考えます。

次に、今までの道徳指導、生活指導に、さらに学習指導を加え、調和のとれた教育活動を推し進めたいと思います。

とは申しましても、このようなことは、学校だけでは、とうていできることではありません。子供は、一本の足を学校に、もう片方の足を家庭において立っています。

したがって、この両者にくい違いがあれば、子供はたちまちころんでしまいます。

言うまでもありませんが、学校と家庭とは、子供の健全育成という点で、共通の願いをもっています。子供の将来については運命共同体であります。

こう考えますと、学校と家庭とは、必ず手を結ぶことができるはずであります。しっかりと手を結ぶことができた時、子供は、一歩一歩、しっかり歩きだすのだと思います。

嶋田校長先生は、国語教育の分野をはじめ子供たちに確かな力をつけていく権威者として、広く全県に知られています。

新しい学級担任と共に８１８名が船出

ー新１年生１５５名を迎えた上地丸ー

学年組	男子	女子	合計	担任名
一ー一	二一	一八	三九	小林　明子
一ー二	二一	一八	三九	守山　妙子
一ー三	二一	一八	三九	松本　博子
一ー四	二〇	一八	三八	渦本　妙子
二ー一	一九	一六	三五	猶井　幾子
二ー二	一九	一六	三五	川尻美智子
二ー三	一九	一六	三五	近藤　八穂
二ー四	一八	一七	三五	太田　恭子
三ー一	一八	一八	三六	大沢　峰
三ー二	一八	一七	三五	夏目　恒男
三ー三	一八	一八	三六	田中　鉄也
三ー四	一八	一七	三五	松野加代子
四ー一	二〇	二三	四三	青木　純
四ー二	一九	二三	四二	横水　宏
四ー三	一九	二三	四二	河合　友子
五ー一	二三	一九	四二	土屋　寿子
五ー二	二二	二〇	四二	金子　育子
五ー三	二二	二〇	四二	青山　静夫
六ー一	一七	二六	四三	佐宗　正義
六ー二	一八	二五	四二	渡辺　修
六ー三	一七	二五	四二	高橋由美子

「力いっぱい」

～退任式でのご挨拶～

去る六日（月）上地小学校を退任される五人の先生方とのお別れの退任式が行われました。土岐教頭先生が、それぞれの先生の紹介をしました。

野田校長先生・この四年間、開校の支えとしての礎を作って下さいました。

加藤先生・ふれあい牧場での動物たちのお世話をありがとうございました。

内田先生・上地小学校のあいさつ運動をもりあげて下さいました。

玉置先生・ＵＨＦ放送の開局・お世話ありがとうございました。

森校務員さん・上地小学校を縁の下から力強く支えて下さいました。

この後、五人の先生からお別れのお言葉をいただきました。子どもたちもじっと聞き入り、涙を流す場面も見られました。去っていかれる先生とのいくつかの思いでに浸っていたのでしょう。

野田校長先生

「みんなと一緒に作ってきた上地小です。だから、いつまでも、心が甲山中にいきませんでした。でも、今日から、新しい学校でがんばります。」

加藤先生

「上地っ子の皆さんとヤギ・チャボと一緒に過ごしたことは忘れません。みんなは、心がとっても優しかった。」

内田先生

「皆さんは、あいさつがよくできました。それだけではありません。何でも力いっぱいできました。」

玉置先生

「皆さんや上地小の先生のように優しい心の人たちに教えられて、初めての竜海中学で力いっぱいやっていきます。」

森校務員さん

「上地小で竹の節を削ったり孫の手を作ったり、メリーが死んでしまったり、忘れられない経験をしました。一生の思い出になりました。」

心が通いあった退任式でした。

お世話になります

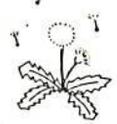
～新任のご挨拶～

本宿小より　校　長　嶋田　稔
六ツ美中より　校務補佐　三津井秀夫
六名小より　四年担任　青木　純
矢作南小より　二年担任　太田　恭子
愛教大卒業　三年担任　田中　鉄也
六ツ美中より　校務員　岡　恵美子

「開校五年目を迎えた意義深い年に赴任できたことを喜んでいます。輝かしい伝統を汚すことなく、力いっぱいがんばっていきます。」

主な四月行事予定

十三日　家庭訪問週間（十八日まで）
　　給食開始
十四日　貯金日
二十日　一年生給食開始
二十一日　ツベルクリン接種
二十三日　ツベルクリン判定
二十四日　心電図検査
　　あおい号
二十七日　ＢＣＧ接種
二十八日　検　尿



上地

元気いっぱい

～上地っ子～

四月二十二日（木）第二時の放課です。気温は二十五度を越え、初夏を思わせるポカポカ陽気です。

子どもたちは、ほとんどが半そでシャツに半ズボンで飛び回っています。運動場では、サッカーボールをけったり、鉄棒にぶらさがったりして遊んでいます。

バスケットコートでは、三年生の子たちが田中先生や青山先生とドッジボールの「真剣試合」に挑戦しています。青山先生のボールが、うなりをあげています。しかし、子どもたちも負けてはいません。

「えーいっ」

「やられた！」

下半身をねらわれて、とうとう、青山先生がダウン。

「いつもやられちゃう。」

太い体をゆすって、青山先生が笑いながら外野に移動しました。「若さ」を誇る田中先生は、「不敗」の様子です。

心優しい上地っ子

中庭では、一、二年生の子たちが、低鉄棒シーソー、ジャングルジム、ブランコ、すべり台、雲てい、砂山などで百人以上も遊び回っています。「ふれあい牧場」の柵の外で、

「ねえ、先生、中に入ってもいい？」

「うん、いいよ。先生がおる時は入ってもいいよ。」

こんな会話の後、一年生が、「ワーッ」と歓声をあげて走りこんで行きました。さっとチャボを抱き上げています。

「ねえねえ、先生、ヤギさんのフンって、チャボのより小さいんだねえ。」

「おかしいっー」

「ワアッ、パン食べてくれた！」

一年生が、次々と、可愛いらしい発見をしていきます。第三時始業のチャイムが鳴り、ヤギとチャボだけの静かな「牧場」にもどりました。

じゃがいも園できる

～四年生の栽培学習始まる～

四年生の清水、青木、河合三人の先生が、子どもたちと一緒になって、南門近くにじゃがいも園を作りあげました。乾燥注意報が続き、地面はカチカチです。一週間がかりの畑作りでした。

十八日（土）の午後、先生たちに聞きました。

「畑に、鶏糞を四袋入れた。これから、堆肥をうねの間に、どっさり入れようと思っています。」（清水先生）

「一人で一個の種いも一学級三うねずつ植えました。」（青木先生）

「きっと、去年の四年生のじゃがいもより大きいのを作ってみせます。」（河合先生）

九十平方メートルの「じゃがいも農園」から、どっさり収穫される日を楽しみにしたいと思います。しばらくの間、かわき切った、「農園」に四年生の子どもたちによるバケツリレーが続くことでしょう。

額に汗をにじませた半そでシャツの河合先生が、畑から帰ってにっこり笑いました。

「即席童話」
～ごんべいさんの目玉～

今年度第一回の四、五、六年生による児童委員会が開かれた四月十六日（木）のことです。二、三年生の子たちを全員、体育館に集めました。

低学年の担任の先生に代わって、嶋田校長先生が、手作りの「即席童話」を始めました。

題して、「ごんべいさんの目玉」です。何が始まるのかと、瞳を輝かせていた「ちびっ子」が、お話に吸い込まれていきました。

「ウフフフ」

「アッハッハッハッ」

いつの間にか、体育館中が、お話に集中してしまいました。大要をメモしましたので、ここに紹介します。

むかし、ごんべいさんという人がおりました。目の病気にかかってしまったごんべいさんは、何でも泊してしまうヘボン先生に診てもらいました。

こんな病気はすぐ治る。先生は、そう言って目玉をくりぬいて洗面器の中で洗いました。

ああでもない、こうでもないと話しながら洗っていたので目玉がふやけてしまい、目に入らなくなってしまいました。

なあにこんなこと。そう言って、ヘボン先生は、目玉を外に干しておきました。すると野良犬がパクッと、食わえて走って行ってしまいました。

後を追って、捜しましたが、目玉はどうしても見つかりません。ごんべいさんは、泣きそうです。ヘボン先生は、平気で、代わりに犬の目玉を入れてやりました。犬の目玉は、夜でもよく見える、安心しなさい、と言いました。

ごんべいさんは、前よりよく見えるようになったので、喜んで家に帰りました。家の近くまで来ると、急に、おしっこがしたくなりました。ところが、どうしたことでしょう。

電柱に片足上げて、おしっこをしてしまいました。それからというもの、ごんべいさんの目は、夜もよく見えるようになりましたがおしっこは、いつも片足上げて電柱にするようになってしまいました。

嶋田校長先生が、「片足上げて」身振りよろしく、ちびっ子たちに語り聞かせていきました。

ごんべいさんの困り果てたあわて顔と、ヘボン先生のとぼけたしぐさに、時間を忘れた子どもたちでした。きっと、帰宅後の夕食で「嶋田節」の「みやげ話」に花が咲いたことでしょう。

PTA廃品回収

今年度第一回の廃品回収にご協力ありがとうございました。十万二千六十円でした。学校施設設備の充実に活用させて頂きます。

主な五月行事予定

一日　葵博見学
八日　あおい号
九日　授業参観と教育講話（親と子）
十三日　貯金日
十五日　一年生交通教室
十九日　春の絵をかく会
二十二日　あおい号
二十四日　上地学区民体育祭

上地

学級紹介集会

―学校木ケヤキに集う―

開校五年目を迎えた上地小学校の伝統になってきた子どもたちの「学級紹介」集会が、続いています。年度初めの子どもたちのふれあいを深めたり、学級づくりにもつながり、年々出しものにも趣向がこらされてきました。

五月の学校にとって、なくてはならないものになってきました。

五月七日（木）第一時、高橋先生指導による「学級紹介」集会が開かれました。「大きな口はワアー、一の口は奥歯をかんでシーン手は拍手・・・」高橋先生が、学校木ケヤキの下に集った八百十八人の子どもたちに話しかけています。「牧場」から、ピーチの鳴き声が聞えてきます。風もなく、五月晴れ。絶好の集会日和です。八時三十五分です。

「おはようございます。今日は、今年初めての学級紹介です。とっても楽しみにしております。力いっぱいやって下さい。」

校長先生の力強い挨拶です。

「ファイト！上地っ子！」

全校の大発声で、いよいよ開幕です。五の二・・・皆さん今日は。五の二は「金子方式」をしっかり仕込まれています。一時間目はお説教で始まりました・・・。

子どもたちの熱演に校長先生もにっこり。サンクガーデンに爆笑の波が高まりました。

二の一・・・酒井先生は、牛みたいに大きなお腹をして、のそのそ歩いていまーす。みんな仲良しファミリーです・・・。

三の一・・・ぼくたちの大好きな勉強は体育です。他には、給食がみんな好きでーす・・。

四の一・・・先生に叱られたり、一緒に遊んだりして、とても楽しく過ごしていまーす・・・。

一の一・・・私たちの先生は小林先生です。やさしく勉強を教えてくれまーす・・・。

一の四・・・先生は、とっても美人の満本先生です。スマートです。気をつけ！礼！・・・

六の一・・・毎日毎日、楽しいことばかりです。佐宗先生は、みんなの気持もよくわかってくれまーす・・・。

サンクガーデンの階段下に腰を下していた佐宗先生が、にっこり笑って額に手を当てました。

「牧場」の方から、チャボを抱いて四年生の前田君がやって来ました。

「これ、かあちゃんちゅうだよ。」

と、教えてくれました。どうしてなのか、話を続けてみました。

「ほやねえ、二匹も子どもを生んだもん。」

「ふーん、その生まれた子がオレンジちゃんか？」

「そうだよ。オレンジと十億ターボだよ。」

「ターボって、スピードに関係あるの？」

「ほやねえ、すっごく速いもん。」

オレンジを抱いた小森さんも、こっくりとうなずきました。

ヒバリの話

～全校朝会での校長先生の話～

五月十一日（月）の全校朝会で、嶋田校長先生から、バードウイークにちなんで次のようなお話がありました。

「みんなが学校に来る時、ヒバリがチーチー鳴いていますね。知っていますか。先生の小さい頃、よく見ましたよ。畑から、まっすぐ上に飛び上がって行きます。そこへ、すぐに走って行って探しても巣は見つかりません。

今度は、また、空からまっすぐに舞い下りて来ます。急いで見に行きますが、またまた姿はありません。ヒバリは、用心深いんですね。決して、自分の巣から飛び立ったり、下りたりしないんですね。ところが、ある時、やっと巣を見つけて、卵にさわりました。でも、その時から、もう親ヒバリは、二度と来なくなってしまいました。人間の匂いが、巣についてしまったからなのでしょう。そして卵は、冷たくなってしまいました。」

わずかに残った上地学区の田畑から、ヒバリのヒナが巣立っています。身近な暮しの中の心温まる「ふるさと」のお話でした。

三年生の子たちに聞きてみました。

「みんな、校長先生のお話にあったヒバリ見た？」

「うん、よく見るよ。」

「まっすぐに飛んでいくもん、よくわかるよ。」

「それに、よう鳴くもんね。」

新興の住宅地に「ふるさと」が着実に根づきつつあることを喜びたいと思います。

五月晴れの好天気

～絵をかく会～

五月十八日（月）、春の「絵をかく会」が初夏を思わせる好天に恵まれて行われました

三年生は南公園です。「なかよしの塔」の下に集まって松野先生の話を聞いています。

「今日の画用紙は、特別のです。ボコボコの方に、筆をたたくようにしてかくといいよ。かく場所は、決まったかな。マジックで下書きしてから、思いきりかきましょう。」

前もって、公園内を案内してあったためかお話が終わると、子どもたちは、いっせいに目的地に駆け出しました。

「汽車が動いたー」

ベンチで、汽車の発車を今か今かと待ち構えていた子どもたちが、大喜びです。

ゴー、ゴー。木影から姿を現わして来ました。早朝のせいか、乗客は父と子の二人だけです。ちびっこ「絵かきさん」を見て、にっこり笑いました。

二年生は、上地一区の「加藤牧場」です。

「五十頭ほどの乳牛がいます。どうぞ、どうぞ。」

奥さんの親切な案内で飼育小屋に入って行った二年生。

「ワー、すごい！」「あっ、うんちした！」

初めての「牧場」に驚きの声があがりました。

主な六月行事予定

四日　避難訓練

十二日　貯金日

十五日　プール開き

十九日　PTAグループ活動開講式

二十六日　親子さし木の会

上地

水しぶきに歓声

―水泳シーズンがやってきた―

六月十六日（火）第一時、雨のため一日延期したプール開きを行いました。すっかり、雨も上がり、つゆ空に薄日がもれています。

この日の早朝から、水泳部顧問の青山先生や当番学年三年生の大沢・松野・田中先生たちがプール消毒等の諸準備を進めました。

体育主任の夏目先生は、前日の雨に打たれてぬれた山に入り、清めの榊を手にして出勤しました。

八時十分には、準備万端整い、開会を待つばかりとなり、水温十八度、気温二十一度とやや冷たいプール開きになりました。

八時四十分、全校の子どもたちが、プールサイドに勢ぞろい。いよいよ今年度プール利用の始まりです。夏目先生のよく通る開会の言葉がスピーカーを流れました。

「今から、プール開きの式を始めます！」

続いて、嶋田校長先生の挨拶。

「水はね、バカにすると、とても危険です。先生は今、水の神様に全校の皆さんの無事をお祈りしました。先ず、水に浮くことのできる子になって、今年の夏の間に、みんな力を合わせて、二十五メートル以上泳げるようにしましょうね。」

この後、プール学習五つの注意を全校唱和し、安全を誓い合いました。

水泳部代表の十五人の子が、次々とクロール、平泳ぎ、バック、バタフライを見事に披露してくれました。

「バタフライってね、とってもむずかしい泳ぎなんですよ。〃イルカちゃん〃って言う人もいますよ。」

水泳部試泳と顧問の青山先生の解説に、プールサイドから大きな拍手が起こりました。

「水の中とっても温かだったよ。」「水から出たら、ブルブルふるえちゃったよ。」

早速、午後から、プールで初泳ぎに挑戦した三年生が感激を話してくれました。

「ヘビに飲まれた？」

六月十七日（水）の朝八時。

「先生、もう四日目になるけど、いつ見ても親ばとが巣でじいっとして動かないよ。」

四年生の子たちをメンバーにして誕生した「上地野鳥クラブ」の六人が職員室にやって来ました。（成瀬・中村・天石・田中・白井・貴君たち）

この子たちは、すでに一週間も前から、夜間照明用トイレの裏側にある二メートル程の木に、鳩が巣をかけていたのを見つけて観察を続けていました。

「雄は、いつ巣にもどってくるのかな。」

「ひなは、いつごろかえるのかな。」

「卵は、どんな色をしているのかな。」

と、夢をふくらませて話して行きました。

ところが、その明くる日のことです。朝七時、巣の下がざわついています。二羽の鳩が飛び立ちました。見ると、もう、卵がありません。クラブの子が、口々に言いました。

「ヘビにやられたじゃない？」

「羽がそこらじゅうに散らばっている。」

鳩とヘビのドラマが幕を閉じました。

訓練が地震発先生！

―今年度初の避難訓練実施―

六月十四日（木）第四時、「防災訓練」担当の三津井先生立案による避難訓練が行われました。「地震に続いて火災発生」を想定しての今年度初の避難訓練です。

「すばやく」「無言」が訓練の目標です。十一時五十五分、「非常用放送設備」を作動させ、開始しました。

「訓練地震発生、訓練地震発生。全校の皆さんは机の下に避難しなさい。」

緊急放送が流れると、子どもたちが一斉に机の下に身をかくす音が聞えてきます。次の瞬間、全校が静まり返りました。

昇降口では、三津井先生演出による発煙筒から激しく煙が上がり始めました。十二時一分、いよいよ、避難命令です。

「全校の皆さんは、上靴のまま帽子をかぶりハンカチで鼻を押え、運動場南側に直ちに避難しなさい。」

担任の先生の先導で、小走りに避難に向う子どもたちの姿が見え始めました。

「三年三組、欠席無し。現在員三十六名、異状無し。」

担任から学年主任へ、そして教頭先生へ。三分間の全校避難でした。嶋田校長先生が、ハンドマイクを握って話しました。

「今年度最初の避難訓練、とても上手にできました。先生は、三河大地震も経験しましたが、一番大事なことは、あわてないということです。担任の先生のお話をよく聞いて、とても立派にできました。」

五年生の広松君が、訓練の後で言いました。

「今までで最高の避難訓練だった。煙たくて前が見えなかった。やってよかった。」

「お日生さまになってはいけませんよ」

安全委員会の子たちによるケガ防止の児童集会が、六月十三日（土）に開かれました。

学校の中での衝突事故、下校後の交通事故などが、ステージで寸劇化されました。

集会の最後に、交通安全担当の金子先生から、自身の体験をもとにお話がありました。

「運動がとっても得意なA君が、飛び出しで車にはねられてしまいました。担任の先生たちと病院にかけつけた時、A君の顔は、はれあがって、ぼんぼんでした。A君の名前を呼び続ける両親に一回も声を返さず、朝の四時お星さまになってしまいました。学級のみんなは、A君にオーイ、そんなところにいないで、僕たちと遊ぼうよーと呼びました。

でも、もうA君は帰って来ませんでした。皆さんの命は一つしかありません。先生は、絶対、みんなにお星さまになってほしくありません。」

涙を浮かべて語りかける金子先生に、上地っ子の真剣な顔が集まりました。

主な七月行事予定

一日　市制記念日
十日　あおい号
十一日　ＰＴＡ委員会
十三日　給食終了日
十四日　個別懇談会
十五日　個別懇談会
十六日　救急法講習会
十八日　通学団会
二十日　終業式

上地

開校五周年を飾る

―上地小チーム球技大会で大活躍―

七月二十一日から三日間、今年度の小学校球技大会が行われました。三十度を越える猛暑の中で、流れる汗に上地っ子の意気を込めて「力いっぱい」の大健闘でした。

上地小は、男子サッカー・ソフト、女子バレー・バスケの四チームが出場しました。どのチームも、日頃から鍛えてきた実力を発揮して戦いました。

「勝敗も大事ですが、上地小学校の子らしい立派な態度でがんばってきて下さい。」

選手激励会での嶋田校長先生の励ましを受けての熱戦となりました。

優勝勝ー一、準優勝勝一

ソフト…本宿小と対戦、肉迫しましたが五対一で惜しくも敗れました。「一つずつ勝ち進みたい」という意気込みを感じましたが、残念でした。

サッカー…「今年も必ず優勝旗を持ち帰りたい。」キャプテンの荒木君の言葉通りの激戦となりました。六試合を戦いぬき、決勝戦では細川小を三対一で降し二連覇を果たしました。準決勝で、二対一の苦戦を乗り越えての優勝でした。

バレー…「打倒、竜美丘」を目ざして、選手一丸の好プレーを続け決勝戦に勝ち進みました。予想通り、優勝への大きな壁となっていた竜美丘との決戦です。大沢・高橋両先生の落ち着いた采配の下、ついに「宿敵」竜美を二対０とふり切り念願の優勝を勝ち取りました。

バスケ…「実力では優勝候補」とは、他校の先生たちの共通した見方でした。一試合ごとに地力を増し絶好調の六ツ美南部小と決勝で対戦しました。手に汗にぎる大熱戦に会場は息も止まりそうです。「どちらにも勝たせたかった。」観戦した方たちの感激の声でしたがわずか六点差で惜敗、準優勝となりました。昨年度の三位に続き、一歩ずつ着実に実力を上げてきたバスケットチームに大きな声援が寄せられています。

水泳大会でも入賞

―六年生の沢さん下川さん―

球技大会に続いて、七月二十九日連尺小学校で水泳大会が行われました。六月始めからの練習の成果を発揮し、どの選手も力泳しました。

中でも、六年生の沢玲子さんは五十メートル背泳ぎで三位に入賞、四十一秒三の好タイムでした。また、下川昌子さんも五十メートル平泳ぎで五位に入りました。

東海大会で初優勝

―バレー部宿願を果たす―

ライオンカップ愛知県大会では、惜しくも準優勝に終わりました。続いて、八月二日大垣市体育館で、県大会二位までの八チームが集まり、トーナメント戦が行われました。

この日、バス一台をチャーターし、少年団の荒木さんを始めとする大選手団が参加しました。昨年一昨年と準優勝に甘んじてきた上地小チームでしたが、この日は波に乗り切り存分に実力を発揮、山中小男子チームの会場を揺るがすような声援も得て三戦三勝、とうとう念願の優勝盾を手にしました。

上地

開校五周年を飾る

―上地小チーム球技大会で大活躍―

七月二十一日から三日間、今年度の小学校球技大会が行われました。三十度を越える猛暑の中で、流れる汗に上地っ子の意気を込めて「力いっぱい」の大健闘でした。

上地小は、男子サッカー・ソフト、女子バレー・バスケの四チームが出場しました。どのチームも、日頃から鍛えてきた実力を発揮して戦いました。

「勝敗も大事ですが、上地小学校の子らしい立派な態度でがんばってきて下さい。」

選手激励会での嶋田校長先生の励ましを受ての熱戦となりました。

優優勝二、準優勝一

ソフト…本宿小と対戦、肉迫しましたが五対一で惜しくも敗れました。「一つずつ勝ち進みたい」という意気込みを感じましたが、残念でした。

サッカー…「今年も必ず優勝旗を持ち帰りたい。」キャプテンの荒木君の言葉通りの激戦となりました。六試合を戦いぬき、決勝戦では細川小を三対一で降し二連覇を果たしました。準決勝で、二対一の苦戦を乗り越えての優勝でした。

バレー…「打倒、竜美丘」を目ざして、選手一丸の好プレーを続け決勝戦に勝ち進みました。予想通り、優勝への大きな壁となっていた竜美丘との決戦です。大沢・高橋両先生の落ち着いた采配の下、ついに「宿敵」竜美を二対０とふり切り念願の優勝を勝ち取りました。

バスケ…「実力では優勝候補」とは、他校の先生たちの共通した見方でした。一試合ごとに地力を増し絶好調の六ツ美南部小と決勝で対戦しました。手に汗にぎる大熱戦に会場は息も止まりそうです。「どちらにも勝たせたかった。」観戦した方たちの感激の声でした。わずか六点差で惜敗、準優勝となりました。昨年度の三位に続き、一歩ずつ着実に実力を上げてきたバスケットチームに大きな声援が寄せられています。

水泳大会でも入賞

―六年生の沢さん下川さん―

球技大会に続いて、七月二十九日連尺小学校で水泳大会が行われました。六月始めからの練習の成果を発揮し、どの選手も力泳しました。

中でも、六年生の沢玲子さんは五十メートル背泳ぎで三位に入賞、四十一秒三の好タイムでした。また、下川昌子さんも五十メートル平泳ぎで五位に入りました。

東海大会で初優優勝

―バレー部宿願を果たす―

ライオンカップ愛知県大会では、惜しくも準優勝に終わりました。続いて、八月二日大垣市体育館で、県大会二位までの八チームが集まり、トーナメント戦が行われました。

この日、バス一台をチャーターし、少年団の荒木さんを始めとする大選手団が参加しました。昨年一昨年と準優勝に甘んじてきた上地小チームでしたが、この日は波に乗り切り存分に実力を発揮、山中小男子チームの会場を揺るがすような声援も得て三戦三勝、とうとう念願の優勝盾を手にしました。

上地

授業参観に七百余名

―今年度の学級懇談会も開く―

夏休みが終わり、学校はスポーツと学習の秋を迎えました。児童数も八百二十四名にふくれあがって二学期が始まりました。

去る九月八日（火）第二時間目から授業参観・学級懇談会が行なわれましたが、夏休み明けにも拘らず、九割以上の保護者の皆さんの出席がありました。参観は、七百三十二名と、実家庭数を上回る盛会でした。続いて第三時間目から行なわれた学級懇談会には、どの学級でも十名以上の出席があり、全校で四百名に達しました。

残暑厳しい中で、六年生は学年合同の水泳授業、他の学年は教室での授業に汗を流しました。熱心にメモを取ったり、子どものノートをのぞき込んだりしているお母さんの姿もありました。お母さんの熱い視線を背に、子どもたちの発言にも力が入ります。

授業の後で、学級ごとに担任や学級委員さんを囲んで実施された懇談会も十一時四十五分までの正味一時間、熱心に続きました。

・夏休みの生活
・友だち関係・遊び
・お小遣い・お手伝い
・家庭での学習・塾通い・しつけ
・安全な登下校

など身近な問題が取り上げられました。

「もう校歌を作ってもよい頃ではないか」

「どの子も活躍できるような部活動のあり方を考えてほしい」

「子どもたちの言葉づかいは現状でよいか」

「歩道橋や信号をもっと設置したらどうか」

といった、貴重なご意見も寄せて頂けました。

子ツバメ巣立ち

六月に学校の玄関に巣作りをしたツバメ。上地っ子の優しい声援に応えて、七月二十一日、とうとうヒナを誕生させました。以後、親ツバメは野鳥クラブの子たちの調査によれば、一日二百回余の餌運びをせっせと続けてきました。

この間、各新聞社の取材もあり「ツバメのひなスクスク」「巣立ちの日心待ちに」と題して報道もされてきました。夏休み中とあって、十八日、全校出校日での巣立ちを期待していましたが、思うに任せず、「予定通り」ひな誕生から三週間後の十三日にその時がやってきました。

この日の朝、六時四十分。玄関の巣には、昨夜まで確かにいた五羽の姿がありません。

「夜明けと同時に巣立ちしたんですね。」

「きっと、日の出を待って飛び立ったんだ」

「体育館北の木々まで、飛んで行っては、練習しただろう。」

宿命の巣立ちに、職員のツバメ談議が続きました。

「先生！子ツバメがおる！」

「校舎の壁にくっついておるよ！」

「あれ、あれ、飛んどる！」

「飛ぶ練習しとるじゃない？」

子どもたちの「大発見」でした。見れば、親ツバメがついての「特訓中」です。来夏、この上地出身七羽のファミリーが再び姿を見せてくれることを祈ります。

奉仕の汗を流す

―全校で南公園清掃活動に参加―

九月二日（水）第二時から、全校そろって南公園清掃奉仕活動に参加しました。ＰＴＡ役員・環境整備部委員さんも作業着姿で応援に駆けつけて下さいました。

「先生、こんなにたくさん落ちていたよ。」

「どこどこ、見せて。」

「うん、いいよ。」

一年生が駐車場のゴミ拾いをしています。もう、ビニル袋がいっぱいにふくらんでいます。中を一緒にのぞいてみました。空きカン、ストロー、カンのふた、タバコ、ガム、キャラメル、ポテトチップ・・・・

近くでは、お母さんたちが、竹ぼうきで、ゴミを掃き集めています。南公園駐車場に母と子の美しい奉仕の汗が光っています。

遊園地の方に向かうと、

「私たちの二年生の頃は、学校から南公園までそろって泳ぎに来たんだよね。」

「まだ、学校にプールがなかったもんね。」

と、六年生の女の子が話しています。

「そうか、それで、この清掃奉仕活動が始まったのか。」

「そうです。プールを使わせて頂いたお礼の気持もこめていたんです。」

内海ＰＴＡ副会長さんや校長先生が、汗を拭きながら話しています。

発光車オーライ

―一輪車に子どもたちの人気集まる―

夏目先生を始め体育部の試みで、夏休み中に八台の一輪車が導入されました。

「私たちもやらせて。ねえ、早く。」

「危なくないように気をつけてやるから。」

一、二年生など低学年にも、人気が高く、可愛い声が何度も職員室に催促にやって来ます。

「こんなに人気があるとは予想以上です。ヘルメットの用意もして始めたい。」

と、夏目先生。

六年生が担任の渡辺先生と運動場で始めました。新任の田中先生も、職員一番乗りを目ざして、本格的に練習開始です。

「さすがに、子どもです。早いですね。」

「まあ、じきですよ。」

今のところ、先生たちは確実に一歩も二歩もおくれているようです。スイスイと、前へ後ろへ、ハンドルさばきも鮮やかに上地っ子の一輪車が走り始めました。試運転、まずは順調なすべり出しです。

近藤・満本両先生産休

二年生と一年生担任の近藤八穂先生・満本妙子先生が十一月出産予定を前に九月二十日過ぎから休暇に入ります。無事ご出産をお祈りします。

二年生と一年生の後任には、奥平卓子先生今校弘子先生が当たります。

主な十月行事予定

四日　運動会

十日　市民体育祭（選手参加）理科展

十六日　秋の遠足（バス利用）

二十日　絵をかく会（給食なし）

二十一日　歯科検査

二十二日　歯科検査・ＰＴＡ研修旅行

二十四日　学校・学区合同防災訓練（消防署来校実地訓練）

三十一日　おかざきっ子展作品搬入

上地

千年前の指の跡

―堤ケ入山中で登り窯跡を発見―

二十一日（月）の児童朝会。雲一つない、ぬけるような秋空の下で元気いっぱい「おはようございます」の挨拶で始まりました。

校長先生が、堤ケ入山中の窯跡から発掘した焼台を手にして話しました。

「この石ころみたいな、ちょっと見ただけでは何でもないような物。何だと思いますか。千年も昔の、この上地の山にタヌキやリス、キツネそしてウサギたちの動物がたくさん住んでいました。でも、それだけではありません。夏休みに先生たちで調べてみました。そうしたら、堤ケ入の山の中に焼き物をする人たちがいて、山の斜面に穴を掘って粘土を焼いていたことが分かりました。茶碗やお皿、それから、壺などを焼いていたのです。この焼台は、焼き物を置くのに使った台です。よく見ると、焼いた人の指の跡がはっきりと残っています。すごいですね。山があっただけではなくて、もう、人が住んでいたんです。夢のような、本当のお話です。」

子どもたちは、「千年前の」夢の世界にびっくりして聞き入りました。放課になると、六年生の子たちが職員室にやって来ました。

「先生、私たち、堤ケ入の山の中に行ってみたいんですけど、細かく教えて下さいませんか。是非見てみたいんですが。」

堤ケ入の山を見上げて話すこの子たちの瞳は「千年前の指の跡」に魅せられ、輝いています。

「君たちのその熱心さ、いいねえ。でもね、今はヘビの危険もあるし、こうした文化財は自由に掘ったり探したりできない法律があってね。先生たちも、役所の許可を得て行ったんです。もうちょっと待っていて下さい。」

「はい、分かりました。でも、びっくりしたね、校長先生の話。」

とても強い関心が感じられます。

「じゃあ、校長室にある実物を見て行く？」

「はい、見せて下さい。」

自分たちの指を「焼台」に当てて、またびっくり。

「わあ、そっくりじゃん。ぴったり合ってしまう。」

千年前の「上地焼き物師」が、上地っ子との初の対面をした一瞬でした。

（この事については「ふるさと上地シリーズ３」としてまとめられています。多少の残部がありますので、ご希望の方にはお分け致します。お申し出下さい。）

教育実習始まる

卒業後、教職員を目指している大学生の教育実習が九月二十八日から始まっています。

愛知教育大　中根浩智君　五の三
宇野敦子さん　養護（一の一）
名市保育短大　脇田須美恵さん　二の二

この三名が、主として青山・中根・小林・川尻四先生の指導を受けて実習に参加しています。

「この素晴らしい上地小学校で一人前の先生になるために、十月二十四日までの四週間、力いっぱいがんばります。」

新しい先生を上地っ子が笑顔で迎えました

大空にかける夢

―三津井先生、全校児童を前に体験を語る―

九月八日（火）学級懇談会が各教室で行なわれていた時です。全校児童が体育館に集まりました。

「今日はね、三津井先生から飛行機の話が聞けるんですよ。このステージの上にある本物のような飛行機のお話です。」

松原先生の紹介が終わると、上地っ子の大きな拍手に迎えられ三津井先生が壇上に姿を現わしました。低学年の子たちの目も輝いています。オレンジ色のＴＦＣ型機を手にし、大空にかけたロマンあふれる話が館内を熱気に包んでいきます。

「先生はケガが原因で骨髄炎にかかってしまい一年生の頃、毎日、空を見上げて寝ていました。そんなことから、いつの間にか空を飛ぶ物に興味をもち始めていきました。麦の穂すれすれの高さを竹と紙で作った模型飛行機を飛ばしたのは四年生の時でした。この時の感激は、今も覚えています。六年生では、市の模型飛行機大会で、自分の作った飛行機が空の向こうに消えてしまい、優勝しました。こうして、空への夢が更に広がり、パイロットになろうと思いました。でも、足が悪く視力が弱いため、あきらめました。仕方なく今度は飛行機の設計士を夢見ましたが、国語が苦手でこれもだめでした。それ以後は、こうして、エンジンの力で飛ぶ飛行機を作ってきました。今は、岡崎市の模型飛行機クラブの副会長をやっています。作れるようになるまでには、専門の先生の所に一年間通って勉強しなければなりませんでした。みんなも、自分に合った夢を持って下さい。先生にできることは、何でも応援します。」

流れる汗をふこうともせず、大空にかける夢を子どもたちに語りかけていく三津井先生の迫力が会場を圧倒していきます。

「最後に一つ、みんなにエンジンをかけてみせましょう。みんなの方に飛び出すといけないからプロペラはステージに向けますよ。」

スイッチ、オン！大音響と共にエンジン全開。一分間に一五〇〇〇回転の爆発をともなう白煙が館内にたちこめました。胸に響くエンジン音が、上地っ子に生涯忘れることのない感動を呼んで劇的な幕となりました。拍手また拍手。

「三津井先生、これからも、どんどん飛行機作って見せて下さい。」（岡部さん）

「すごいなあ。板切れから自分の手で飛行機を作ってしまうなんて。」（鈴木さん）

「自分の夢をやりぬいてしまうなんて、とっても感心してしまった。」（伊藤君）

六年生の子たちの声です。「大空の夢」が静かに、子供たちの中にしみこんでいきました。

「三津井先生の子どもの頃のお弁当は、ごはんに油あげだけだったなんて、私たちは幸せだな。一回でよいから、本当に飛ぶところが見たいな。」（五年生加辻さん）

上地っ子の夢が広がります。

「先生や親が自身の生活を本気になって語りかけていく時、子どもの目が輝き、大きく変わっていくと言います。今日は、素晴らしい児童集会でした。」

集会後、職員室に帰って来た校長先生も感激して話されました。

上地

陸上大会で甲乙丙優勝

―県営陸上競技場に上地の旗―

去る十月二十五日（日）県営陸上競技場で岡崎市小学校陸上競技大会が行なわれました

前日遅くまで降り続いていた雨も上がり、市内四十二の小学校から選手が参加しました

この日、午前七時、貸切バスに五十人の大選手団が、引率の渡辺・土屋・高橋・金子先生と一緒に乗り込んで出発しました。

「行って来ます。がんばって来ます！」

元気いっぱいの声が早朝の上地小学校グランドに響きました。

夏目・大沢両先生は大会役員として、又、岩瀬・磯貝・中田・小林・河本・小栗の六人の子たちは「補助員」として大会を下から支えています。

九時四十分、いよいよ高学年男子リレーから競技が開始されました。

「学校の代表選手になるのを目指して、お互いに力いっぱい競争していきましょう。市の大会に学校を代表する選手になって、がんばろうね。」

陸上練習を始めた九月二十五日（金）の午後、サンクガーデンに集まった七十人の子どもたちに夏目先生が話していました。以後、一か月間の集中練習を経て、頭角を現わすことになった選手たちです。

高学年リレーでも優勝

レースが始まるや、上地っ子が先頭を競い合う場面が次々と展開していきました。選手の保護者の方々も応援にかけつけ、スタート付近の上地小学校席ではカメラのシャッターが忙しく作動を始めています。

「これは、いけそうだ。」

午前の部、予選が終った頃からこの日の監督をしていた渡辺先生の顔がほころび始めました。

「男子は上位入賞をしそうだ！」

本部での表彰を受けて、賞状を手にした選手たちが、上地小控席に姿を現わす度に、大きな拍手が沸き上ります。優勝をかけて緑丘小学校と優差で競り合っていた男子の総得点が、ついにリードを奪い優勝を決めました。

「やった！。とうとうやった。」

「開校五年目の初優勝だ！」

「サッカー、バレー、に続いて今年度三つ目の優勝旗だ。」

夏目先生を始めとする体育部の先生、そして、一か月という短期間ではありましたが、指導に当たってきた先生たち、選手、保護者の大きな歓声が沸き起こりました。閉会式の後、早速、グランドでは、丸林・荒木両ご父兄のカメラで記念撮影となり、再び、大選手団の汗が秋の日差しを浴びて光りました。

甲乙丙総合優勝

八十メートルハードル　三位　吉田君
走り幅跳び　二位　荒木君
四〇〇メートルリレー　一位　荒木・吉田　野本・鈴木　君等四名

女子総合七位

一〇〇メートル　三位　佐々木さん
走り幅跳び　三位　丸林さん

薄日もさした秋の遠足

十月十六日（金）「一日中雨でしょう。悪くなる一方です。ご存しのように台風十九号の影響で決して良い天候ではありません。」（名古屋気象台係員　午前四時）

「大雨でなければ、決行」これは、この日を心待ちにしてきた上地っ子の夢を予定通りかなえたいとの願いから、前日の職員緊急打合わせの意向でした。早速、校長先生と電話。

「今の雲ゆきなら何とかいけるだろう。」

一決し、バス会社に「決行」を伝えました。

七時三十分、もう、通学団の第一陣が校門に到着しました。

「先生、今日、行くよね。」「台風なんか、来ないもんね。」

「うん、行くよ。楽しみにして来たもんね。」

「わーい。」

八時三十分、小雨混じりの中を出発。

心配していた「悪くなる一方」の予報は、幸いにも外れて、午前十一時頃から薄日もさしこむようになって来ました。

一、二年生は碧南のマリンドリーム

三、四年生は名古屋の東山動物園

五、六年生は大山のリトルワールド

同行したリトルワールドでは、十一時三十分、野外ステージで「中国少年少女雑技団」の「日中友好特別公演」が開始されています

「テレビで見たのと全然迫力が違うね。」

子どもたちの会話がはずみます。一台の自転車に男三人、女十人の十三人が肩を組んでステージを走り回ります。土屋・渡辺先生も一緒に、曇天を吹き飛ばすような笑顔で拍手を続けています。

午後三時三十分、満足しきった上地っ子が雨が上って乾いたサンクガーデンに帰って来ました。「雨天決行」が「結構」な結果となった秋の遠足でした。

教育実習終わる

九月二十四日から始まった教育実習が十月二十八日、四週間にわたる全日程を無事終了しました。

愛知教育大学と名古屋保育短期大学から、三人の実習生を迎え子どもたちも「教生の先生、教生の先生」と、慕って来ました。一年生、二年生、五年生の担当して頂いた学級では、最終日の二十八日には、どこでも心のこもった「お別れ会」が行なわれました。

中根・宇野・脇田の三人の「先生」は、「一生の思い出になりました。是非、本当の先生になって、上地小学校にやって来れるよう勉強に励みます。」と、手作りプレゼントを抱え、感激していました。「お別れ会が終った後、何人かの子が控室にやって来て、先生さようならと言ってくれた。思わず、一人ひとりを抱きしめた。子どもの目にも涙がにじんでいる。げた箱の方へ、何度も振り返りながら行った子どもたち。私は、この瞬間を一生忘れることはないだろう。」A先生実習最終日の「実習記録」です。いくつもの「先生」と上地っ子の感激的なドラマを残して、四週間が終わりました。

主な十一月の行事予定

五日（木）五年生少年自然の家野外生活

八日（日）第五回上地小学校文化展

十四日（土）防災訓練

十九日（木）就学時健康診断（午前中授業）

二十六日（木）修学旅行

上地

大規模な防災訓練

―上地小学校開校以来初の試み―

十一月十四日（土）台風のため延期されていた学区上げての防災訓練が実施されました

四階からサンクガーデンに降ろされたシューターに目を止めて、登校して来た子どもたちが集まっています。

「わー、すごい―滑り降りてみたいなあ。」

早速、にぎやかな会話が始まっています。

岡崎・福岡両消防団の方も制服姿でグランドに張ったテント内で待機しています。九時半には、訓練の主役が勢揃いしました。いよいよ、非常「サイレン」の合図を待つばかりです。

「訓練火災発生、訓練火災発生。児童は机の下など安全な場所に避難し、次の指示を待ちなさい。」

十時五分。校内放送で八三一名の上地っ子に緊張の一瞬がやってきました。続いて、避難命令が発せられ、担任に先導された子どもたちの列がサンクガーデンに集まってきました。

学年主任から教頭先生へ、そして、校長先生へ人員点呼の結果が報告されます。

「二分四十八秒、今までで最も短い時間の避難」（三津井先生）が、無事に展開されました。

さて、この日の第二部「防災訓練」の開始です。四階からシューターによる避難がスタートしました。児童代表、六年生の丸林さんは慎重を期し、二十三秒のゆっくりとした着地。同じ六年生の宮本君は一気にスピードを上げ五秒。最後に、田中先生が四秒の上地小学校「新記録」を達成して、上地っ子の可愛いい拍手を浴びました。

運動場では、「初期消火訓練」が始まりました。PTAのお母さんたちが、消防署員の指示を受けながら「ピンを抜く、ホースを持つ、火元に向ける、レバーを握る」消火器の実演を見事にやりとげています。起震車への乗車、屈折車による上吉旋回と初の体験が次々と進行していきます。

十一時二十五分、市民ホーム前に待機していた内海さん等地元消防団員運転の八台の消防車がサイレンを鳴かせてグランドにすべり込んできました。またたく間に、ホースから水しぶきが上がります。

「すごい訓練だったー」「この次は絶対ぼくもやってみたい。」

十一時四十五分。上地っ子たちの感激の拍手で開校以来初の防災訓練が終わりました。

「松風のうた」を発刊

―嶋田校長「登り窯跡」の創作童話―

十一月二日、「上地の風―ふるさとシリーズ―」五号として校長先生創作の「松風のうた」を発刊しました。この夏休みに、学区内大谷の山中で平安時代の「登り窯跡」を本校職員が発見し、話題となりました。千年のむかし、すでに、この上地の地に「焼き物師」の一団が生活していたというロマンを子どもたち向けに童話として書き上げたものです。

ふるさと上地に取材した童話の発刊を期に読売新聞の報道もあり、次作への期待が高まっています。

ピーチにカーディガン

―「ふれあい牧場に」に上地っ子の愛―

落葉を巻き上げて学校の庭を吹きぬける風も一段と冬の寒さを感じさせるようになって来ました。上地小学校「ふれあい牧場」のヤギやチャボにも厳しい北風が身にしみる季節です。始業前のひととき、牧場を訪ねてみました。もう、たくさんの上地っ子がやって来ています。早速、子どもたちの声に耳を傾けてみました。

「昨日ねえ、帰る時、ピーチがあんまり寒そうだったので自分のカーディガンを脱いでかけてやっておいただよ。ボロボロになっちゃやへんかと心配しとったけど、どうもなってなかった。」

びっくりして、カーディガンを手にして鼻に近づけてみました。確かに一晩、ピーチが着ていたことが分かります。ヤギさん特有の匂いがツーンと鼻をつきます。五年生の小森さんが「よしよし」と、ピーチの背中をなでています。

「先生、ぼくはねえ、チャボのヒヨコが入り口のドアーに首を挟まれてぐったりして、足をけいれんさせておっただよ。それに、寒かったので、ぼく、ジャージを脱いで巣箱の中に敷いて帰っただよ。そうしたらね、明くる朝、まあ、元気になっとっただよ。それが、あのヒヨコだよ。」

今度は、四年生の鈴木君が話してくれました。「牧場っ子」たちの暖かな愛の調べが上地小学校の朝を流れて行きました。

プレハブ校舎の工事

―バスケットコートに建設予定―

来年度からの三学級増が見込まれ、教室不足が決定的となりました。将来計画では南校舎に連結して鉄筋校舎の建設が予定されていますが、それまでの暫定措置としてプレハブ工事が始まりました。

場所は、バスケットコートと決まり、今年中に先ず、一教室建設をと十一月二十日から工事にかかっています。基礎工事の職人さんたちが精力的に仕事を進め、急ピッチにプレハブ校舎ができ上がっていきます。

「上地小学校の教室不足は、すでに限界に達しています。今後も学区内の人口増は、住宅建設の現状から見ても急激に進むと察せられます。更に、工作室・家庭科室等の特別教室もなく、正常な学校教育に支障を来たしています。本格的な校舎増築を急いで欲しい。」

これは、去る十二日（木）午後七時から、上地市民ホームで開かれた「市政を話し合う会」での市村ＰＴＡ会長さんの要望です。

同席されていた渡辺市議会議員・中根市長も「上地学区の将来展望に立って増築を実現していきたい。」と語っていました。

開校五年目にしてプレハブ校舎。上地小学校の大規模校化が急速な進展を見せ始めています。

主な十一一日月行事予定

二日（水）インフルエンザ予防接種
六日（日）映画鑑賞の両親学級
七日（月）代休日
十日（木）インフルエンザ予防接種
十四日（月）半日授業（給食なし）
十六日（水）貯金日
十八日（金）給食終了日
十九日（土）上地っ子文化祭
二十一日（月）個別懇談会（二十二日まで）
二十四日（木）終業式

学校 上地

さらに飛躍を

―開校五年目の春に―

開校五年目の新春を迎えました。昭和五十八年、児童数五八二名、職員二十三名で発足した本校も、現在は児童数八百三十四名、職員三十名の学校となりました。（来年は、さらに三学級増）

この間、学区や保護者の皆様の格別のご協力によって、年毎に充実・発展してまいりました。「学校づくり」に寄せられました皆様方のご支援に対し、厚くお礼申し上げます。

さて、この五年間で、地域に根をおろした学校の基盤は固まりました。次は、この基盤の上に立って、竜の年にふさわしく、一段と発展させたいと思います。

ただ、竜はやたらに大空をかけめぐるものではありません。じっと水中にひそみ、天の時、地の利を見きわめ、時機を考えて飛ぶものです。

上地小学校も、今後もっともっと、ふるさとに根を張り、伸びたいと思いますので、ご協力をお願いいたします。

（上地小学校長　嶋田　稔）

「校歌」完成近づく

―卒業式に披露―

「早く校歌がほしい。」

開校以来の願いが、いよいよ実現間近となってきました。嶋田校長自ら筆を取り、学区指導者の皆様から、貴重なご助言を賜わり作詞を続けてきました。作曲は、市村ＰＴＡ会長の友人で広島大学教育学部音楽科教授、原田宏司先生に依頼、ほぼ完成の段階を迎える運びとなりました。

奥平先生の指導で、合唱部の子たちによる歌唱が録音もされています。上地の山を切り開いて誕生した、新星上地小学校にふさわしい「校歌」を願って、今、最後の調整に入っています。

以下、歌詞を紹介し皆様とともに、校庭に歌声が流れる日を待ちたいと思います。

上地小学校「校歌」

一、若松台に　日が昇り
ひばりも　歌う青い空
けやきの芽吹く　校庭に
みどりの風を　浴びながら
心を開き　励み合う
楽しい上地　みんなの上地小学校

二、大谷の池の　霧が晴れ
なかよく遊ぶ　赤とんぼ
雲の流れる　この丘に
友と笑顔を　交わしつつ
力いっぱい　鍛え合う
明るい上地　みんなの上地小学校

三、三ケ根山を　はるか見て
朝夕あおぐ　京ケ峰
恵み豊かな　ふるさとに
遠い歴史を　受け継いで
あしたの夢を　語り合う
希望の上地　みんなの上地小学校

（作詞　嶋田　稔　作曲　原田　宏司）

夢のせて進水

ー野鳥観察「ＵＥＪＩ号」ー

野鳥クラブの子たちが、学区の奥山田池や大谷池でカルガモの観察・記録を始めたのは昨年の六月からでした。飛来時刻・餌・巣作り・生態と、子どもたちの目はだんだんと深く、そして、広がりを見せてきました。

「もっと近くで観察したい。」

「うんと近づいて写真が撮れたら。」

こうしたクラブの子たちの夢を実現させようと、科学部顧問の三津井先生が「新兵器」開発を思い立ちました。十一月下旬から設計・機材収集と、休日も返上しての製作が続けられてきました。

子どもたちの下校後、学校のプールや奥山田池で数回、「ひそかに」試運転が行なわれました。岸からのリモートコントロールでカメラ搭載のボートを野鳥に接近させようというものです。

「ボートの前進後退・左右の舵取り、カメラの角度・シャッターなど四つをリモートコントロール」する手作りボート「ＵＥＪＩ号」が、完成を見たのは師走もなかば。

こうして、いよいよ十二月二十一日（月）午後三時、「進水式」を迎えることになりました。中日・朝日・毎日・読売の各新聞記者も取材に駆けつけ、この日の主役、野鳥クラブの十人と三津井先生が大谷池西堤防に立ちました。

「おるおる、東のよしの近くに。十五羽はおる。きっと、よしの中にもおる。」

カルガモに気づかれてはと、嶋田校長先生の声が低く響きます。

「よしー発進ー」

前日、最後の改造で押え込んだモーター音をかすかに発して、大谷池史上初の「進水」です。クラブ員・記者・先生たちの視線が、幅四十センチ長さ九十センチの「ＵＥＪＩ号ー３５ー」に注がれました。

静かに、右左と、注意深い舵取りでカモの群れに接近を続けています。あと、十メートルです。と、その瞬間。野生の警戒心は、異常を見事に察知しました。

バタバタバタ、快音を残してカルガモは隊列を組んで私たちの頭上を通り過ぎ、西の空に姿を消して行きました。

「先生ー大成功だよ。ボート、ちゃんと動いたもん。カメラも動いたー」

進水式、第一日目。上地っ子の歓声が大谷池にこだましました。

二つの受賞

ー「学校体育賞と自作ＴＰ」ー

昨年十二月、上地っ子と職員に大きな賞が二つ授与されました。

学校体育賞（対外試合での優勝チームと監督に授与されるもの）

サッカーチーム（夏目監督）バレーチーム（大澤監督）陸上チーム（渡辺監督）

自作ＴＰ入選（授業で使う投影画面の優秀作品に授与されるもの）

土屋・河合・青山・松野・大澤の五人の先生

主な一月行事予定

九日（土）新春交通安全の集い

十六日（土）マラソン大会

二十一日（木）校内書き初め展

上地

学校のえさ台に ウグイスが来た

昨年の十一月二十五日、竹製の野鳥えさ台が三津井先生の手で完成し職員室北側の庭園に設置されました。屋根幅七十五センチ、全長百九十センチの本格的なえさ台でした。

以後、野鳥クラブを初め全校の子どもたちの給餌や観察が続けられてきました。

「だめかなあ。野鳥って用心深いね。」

「でも、スズメぐらいは来てもいいのに。」

冬休みに入る前日、子どもたちがうらめしそうにえさ台を眺めていました。教頭先生が「休み中にはきっと、やってくるよ。」と、激励しています。こうして、待望の冬休みが始まりました。えさ台には、子どもたちが置いていったみかんやパン、そして、小ごめ・柿・バナナ・まんじゅう・ビスケットの七点セットが並んでいます。ヒヨドリが、キーキーとかん高い声で鳴きながら、すぐ近くの桜の木まで来ています。しかし、一向に気づきません。

「あんなところまで来ても分からないのかねえ。」

「いや、もう発見しているはず。」

日直の先生や出勤して来た先生の間で、にわか知識の「野鳥談議」が職員室を賑わせています。そして、年の暮れも押し詰まった十二月三十日（水）午前十時四十分でした。

えさ台の屋根にヒヨドリが止まっています。とうとうやって来ました。上下左右に目を配りながら、みかんをついばんでいます。えさ台設置から三十六日目のことでした。

予想していた通り、食べにやって来たトップバッターはヒヨドリでした。「先輩」が安全に飛び去るのを待っていたかのように、可愛いらしい二匹のつがいが姿を現わしました。

あまりのことに目を疑い、野鳥図鑑を開いて確かめました。そうです。ウグイスなのです。

「これは驚いた。ウグイスとはすごいー」

「冬は本州中部以南の温暖な平地に漂行し、市街地の庭にも飛来」（野鳥図鑑）というウグイスの習性が、見事に上地小学校で開花したのです。

以後、ヒヨドリ・ウグイス・ホオジロ・コジュケイの夫婦が仲良くえさ台のみかんを食べに来ています。

「よく食べるねえ。一日にみかんが三個はいるよ。」

今日もまた、野鳥クラブの子たちのうれしい会話が聞こえてきます。

「りゅうとてんぐ」

嶋田校長先生の創作童話第二作を発刊ー

辰年にちなんで、一月二十七日「りゅうとてんぐの力くらべー大谷池と一本杉のおはなしー」が発刊されました。「松風のうた」につぐ今年度の第二作目の郷土上地をテーマにした創作童話です。

その昔、大谷池に住んでいた竜と上地町岳井にあった一本杉の天狗が力比べをするお話です。

快記録が相次いだ
―校内マラソン大会―

一月十六日（土）前夜の雨もすっかり上がり、絶好のマラソンびよりを迎えました。ＰＴＡ委員さんたち心づくしのおしるこが湯気を立てています。

「天気は上々、力いっぱい走りましょう。」

「おいしいおしるこを作って待ってます。」

校長先生や市村ＰＴＡ会長さんから激励を頂き、１年生からスタートしました。

どの顔も寒さを吹き飛ばし、頬を真っ赤にしてゴールイン。

「ぼくは最後の一周で安田君をぬかした。ぬかしてごめんね。」

「うん、いいよ。」

一年生の鈴木君と安田君のほほえましい会話が聞こえてきます。

一番にゴールした二年生の平野さんが、

「先生、手が冷たくて小指がくっついて伸びやへん。」

と、うれしい悲鳴を上げています。一息入れると、いよいよ、待望のおしるこです。

「おいしい。おかわりしてもいい？」

「そんなら、もういっぱい！」

学年、はそり二はいのおしるこは、またたく間に空になってしまいます。

「一ばい二名、二はい十五名、三ばい十二名四はい三名、五はい四名、六はい一名、七はい二名」

これは、一年生二組の子たちのおしるこ快記録です。

「やったー！十一位だ」

開校以来連続優勝の輝かしい記録を打ち立てた六年生の荒木君。四年間連続の四年生鈴木伸祐君。

「がんばるぞー絶対に優勝ー」

「心で走ったー」

と、「戦士」は話しています。

次に紹介するのは、五年生の新海さんの日記です。

「よういーパーン。ピストルの音。走り出したとたんに、私はなんのことかさっぱりわけが分からなくなった。分からないまま走って行った。やっと、気づいたのは、二周目の時だった。いきなり、苦しくなり、（もう限界だ、もうだめ）と思っていた。やっと、最後のトラックに入って来た。残りの力をあるだけ、ふりしぼって一生懸命走った。真ん中のあたりで一人ぬいた。夏目先生に十一と言われた時、すごくびっくりして、うれしいとは思わなかった。金子先生に紙をもらって、十一の数字を六のあくほど見つめた。それからはじめて喜んだ。すごく苦しかったけれど、心に残った思い出になった。」

「やっぱり、毎日のバレー部の練習を続けたからだね。おめでとう。」担任の土屋先生の激励が、日記に大書されていました。

寄贈一つ紹介

優勝旗陳列ケース（岡崎信用金庫福岡支店）

児童図書十万円（福岡町大河内歯科医院）

ありがとうございました。

主な一月行事予定

七日（日）学芸会

八日（土）代休日

九日（火）学芸会記録写真撮影

十四日（日）廃品回収

上地

「とべ、上地っ子」像
―開校五周年記念―

本校は今から五年前の昭和五十八年の四月上地区画整理地帯の中心地に誕生しました。

初代野田校長は新星上地学区の皆さんとのふれあいを深めながら「力いっぱい」を校訓に掲げ、学校づくりを進めてきました。

そして、五年目を迎えた今年度、嶋田校長が赴任しました。

「早く自分の学校の校歌がほしい。」

「開校五年目を記念したい。」

こんな声を実現しようと、職員・ＰＴＡの協力で「学校だより」新年号で発表したような「上地小学校校歌」が作られました。今、各教室では、合唱部の子たちの歌を録音したテープを聞きながら練習を続けています。

「もう、歌詞を見なくても歌えるよ。」

元気いっぱいの歌声が校庭に校舎に心地よく流れてきます。

「開校を記念したもの」をという声には、ＰＴＡの役員・委員さんたちとも十分話し合って考えてきました。その結果、北海道から九州まで全国各地に、その作品がいきわたっている地元岡崎の石彫家、鈴木政夫氏に依頼することになりました。

嶋田校長と親交のあった鈴木先生は、快よく引受けて下さいました。以後、何度か本校を訪問され、子どもたちと学校を直接見聞きし、彫刻の構想をあたためて来られました。

玄関西の庭園に設置

二月二十四日（水）の朝、職人さん二人を伴なって石彫の「記念像」据え付けのため来校されました。名づけて「とべ、上地っ子」です。

「上地小学校の子どもは顔がいい。表情が明るい。元気がいい。」

これが、先生の目に映った上地っ子の姿でした。

庭の中に、早速、置かれました。子どもの像が三つ、今まであった庭園の石組の上にしっかりと取り付けが行なわれました。

不思議です。まるで、今までも、そこにあったかのような感じがします。新しい像が、落ち着いた庭の雰囲気としっくり調和してしまったのです。

「とべ上地っ子。そうです。上地っ子に足でとべ、腹でとべ、頭でとべ、そう期待しているんですよ。」

先生が静かに感慨をこめて話されました。

「この像を見る子どもたちが、それぞれの思いで感じてくれればいいのです。私は、人間の喜びや悲しみ、生きざまを石で表わしたいのです。」

こうも語られました。

三月五日には、待望の「とべ、上地っ子」開校五周年記念碑の除幕式が行なわれます。

三年生以上の子どもたちが、全校を代表して式典に参列します。当日までは、作品に白布で覆い、大事に保管がされていきます。

「校歌ができあがった喜びと記念碑が重なって、上地小学校の春がやってきました。除幕式が終わったら、ぜひ、大勢の皆さんで見ていただきたいと思います。」

職員一同の喜びの声です。

力いっぱいの熱演

―真剣な演技が相次いだ学芸会―

二月七日（日）マイナス０．六度、時折小雪も舞う寒風が運動場を吹き抜ける天候で迎えた学芸会。朝七時二十分、毛布をかかえて体育館に走り込むお父さんがいます。昭和六十二年度上地小学校学芸会参観者のトップバッターです。

「ストーブを用意はしましたが、寒くて悪いですねえ。」

「いや、たくさん着込んできましたから大丈夫です。」

こんな会話をかわしている間にも、次々と席に座蒲団が敷かれていきます。運動場を見ると、前日、駐車整理のために敷いた白線が早朝から降り始めた雪でかき消されてしまっています。

午前八時三十分、六年生の荒木君がステージからスポットライトを浴びて挨拶を始めました。

「ぼくたちは、今日までの練習を生かして力いっぱいの学芸会を致します。最後までごゆっくりと見て下さい。」

プログラム最初の一ページを飾る三年生の器楽合奏「村祭り」がタイコの響きも軽やかに、会場からの大きな拍手を受けています。

「みんな着物だねえ。今どき、珍しいじゃない。寒くないかねえ。うまいことやるじゃあない。感心しちゃうね。」

出演中の子たちのおばあさんでしょう。着物姿の孫の演奏に満足顔です。

午前の部の後半からは、初代上地小学校長の野田先生も駆け付け、最後まで見て下さいました。

「ステージに上がった子、一人の残らずの熱演。力いっぱいの姿は日本一流です。」

幕間に、ステージから、激励と賞賛のご挨拶を頂きました。

六年生の劇「朝は来ていたのに」「あほう村の九助」「漂流記」、五年生の全員合奏「ハンガリー舞曲」など高学年は勿論、低・中学年の劇にも、終日会場に響きわたる声援や拍手が続きました。

てきぱきとした手際のよい進行で、予定よりも早く、午後二時五十八分、会場を圧倒し続けた「漂流記」をもって終了しました。

「子どもたちの真剣な態度を前にして、目頭を押える場面がしばしばでした。感動の連続でした。素晴らしい学芸会をありがとうございました。」

PTA会長さんからも、開校五年目を迎えた上地小学校の着実な歩みに大きな励ましの言葉を頂き、のべ千人を越える参観を得た学芸会が成功のうちに終わりました。

モニターテレビの寄贈

―岡田胃腸科病院より―

学区内の岡田胃腸科病院さんから、本校の視聴覚教育の進行のためにご寄付を頂きました。子どもたちの活動場面を映写できるモニターテレビを購入し、ご厚志に応えていきたいと思います。ありがとうございました。

主な　二月行事予定

五日（土）「とべ、上地っ子」像除幕式
十二日（土）卒業生を送る会
十五日（火）貯金日
十七日（木）卒業記念植樹
十九日（土）卒業式
二十四日（木）修了式
四月四日（月）入学式

「ありがとう」すなおに言える子、上地っ子

おわりに

ここに「ふるさと上地」の発行をみることができました。

直接あるいは間接にご指導を賜わった方々や、快く資料の収集につとめてくださった各位、並びに古老の方々のご協力に対し厚くお礼申し上げます。

自分の住んでいる上地が、昔はどんな様子であったのか、どんなできごとがあったのか、大変興味があるものです。そして、それを知ることは大切なことです。これを読まれた方たちが、ふるさと上地のむかしに思いをはせ、少しでも郷土に親しみをもってくださるようになれば、これに勝る喜びはありません。

今後、古文書・文献などの資料が発見されました折には、上地小学校にご連絡いただきたくお願い申し上げます。

昭和六十三年三月

上地小学校教頭　土岐　久夫

研究同人

嶋田　稔	土岐　久夫	松原　晄三	本田　源美	三津井秀夫
清水　宏	川尻美智子	金子　喜子	守山　妙子	青木　純
中根美恵子	佐宗　正義	夏目　恒男	小林　明子	太田　恭子
土屋　恵子	高橋由美子	満本　妙子	渡辺　修	松本　博子
酒井　幾子	松野加代子	近藤　八穂	青山　静夫	大澤　峰
河合　友子	田中　鉄也	今枝　弘子	可知喜久子	奥平　晶子
鈴木　尚子	加藤　勝彦	岡　恵美子	永坂治子	

ふるさと上地

発行日　昭和６３年３月１５日
発行者　岡崎市立上地小学校
校長　嶋田　稔
岡崎市上地町欠ノ下１５－１
電話（０５６４）５３－０５０１
印刷所　ブラザー印刷株式会社